バトルグリーン

アメリカ独立戦争が始まった町
レキシントンでの
日常的な民主主義の闘い

月刊情報誌「TAKARAマガジン」
2007年４月～2009年3月連載

まえがき

１７７５年４月１９日、ボストンの北西に位置するレキシントンの広場でにらみ合っていた英国軍と植民地民兵隊が、ひとつの銃弾をきかっけに撃ち合いを始めた。それがきっかけとなって始まったのが「レキシントン・コンコードの戦い」であり、アメリカ独立戦争の始まりでもある。

マサチューセッツ州レキシントン町は、多くのアメリカ人にとって祖国が誕生するきっかけになった重要な場所である。一年を通じて観光客が途絶えないが、ことに「レキシントン・コンコードの戦い」を記念するペイトリオッツ・デーには全米から観光客がおしかける。

アメリカ合衆国は、全体的には右寄りの中道だと言われている。だが、アメリカ合衆国誕生の地ともいえるレキシントン町は、全米でも極めてリベラルである。差別の少ない環境と優れた公立学校で知られるためか、町の公立学校の3割近くがアジア系で、白人ではユダヤ人(全米では人口の1.4%)とカソリックがマジョリティで、次に他国からの移民が多い。全米でマジョリティのWASP（ホワイト、アングロ・サクソン、プロテスタント）は、この町ではマイノリティである。成人人口の６割以上が民主党員であり、2008年の大統領選挙では約７３％がオバマに投票した。

そんな現在のレキシントン町は、自然発生したわけではない。これは、多くの人々のたゆまない努力の結果なのである。１０年ほど前からボランティアなどを通じてそれを知った私は、それを米国に在住する日本人のために、ボストンの月刊情報誌「TAKARAマガジン」で、2007年４月から2009年3月の２年間にわたりルポを連載した。
このEブックは、それをまとめたものである。

２年間にわたって書いたものなので、続けて読むと不自然に感じる箇所もある。対象となる読者は、必ずしも継続して読んでいる人ではなかったので、同じような内容が繰り返されている。また、今振り返ると古い情報もある。

だが、日本のマスメディアが伝える画一的な米国の民主主義のイメージとは異なる、住民レベルでの民主主義を知っていただきたいと思い、あえて無料Eブックとしてまとめてみた。

この機会を与えてくださったTAKARAマガジンのオーナー編集長の中島やすこさんに、この場を借りて感謝したい。

２０１０年　１２月２８日　　渡辺由佳里
http://watanabeyukari.weblogs.jp/about.html

お願い：本Eブックの内容の引用は、出典を明らかにし、商業的利用をしないことを条件に、ご自由にどうぞ。

新連載

バトル・グリーン

第一回　渡辺 由佳里

序章・わがホームタウン

今年は例年にない暖冬だったが、それでもマサチューセッツ州の冬は厳しい。
ドライブウエイの雪かきをするたび、「なぜこんな場所に住み着いてしまったのだろう？」とため息が出る。私の生まれ故郷は降雪量の多い兵庫県北部で、冬の半ばには雪かきをしてもその雪を積み上げる場所がなくなってしまう。重いショベルにすぐ張りつく雪をこそぎ落としては、「大きくなったら絶対に暖かい場所に住む」と誓ったものである。なのに、故郷よりも寒いマサチューセッツ州に住みついてしまったというのは皮肉なものだ。
その故郷に昨年帰省したとき、私はこれまであまり気にもかけなかった風景の美しさに心を奪われた。朝露で銀色に輝く田畑や朝靄がかかった山々、木造家屋と柿の木……。すべてが息をのむほど美しいのである。私はまるで旅行者のように何度も立ち止まっては、風景を心に刻みこんだ。
今回の帰省ではもうひとつの発見があった。１０日ぶりにレキシントン町のバトルグリーンを目にしたとき、旅の緊張感がすっかり消えたのである。そして次の瞬間にはいつものように商店が減って銀行が増えたことを案じ始め、レストランに活気があることに安堵し、美しく保存されている歴史的建築物に誇らしさを覚えていた。いつの間にか、私にとっては生まれ故郷が「異国」で、レキシントン町が「ホームタウン」になっていたようである。

◆◆◆

私にとってこれは新鮮な発見だった。生まれ故郷を発った後、京都、東京、ロンドン、香港……といろいろな場所で暮らしたことのある私だが、一度として住んでいる地域を「わがホームタウン」と感じたことはなかったのである。何年暮らしても昔からの住民にはよそ者扱いされるし、私自身もよそ者でいるほうが気楽だった。田舎で育った私には、「地域の一員になる」というのは、冠婚葬祭での料理の支度、祭りの当番、公共の場の掃除……と面倒な義務のイメージしかない。だから、どこに住んでもずっと「お客さん」でいたいというのが本音であった。
そういう無責任な私の態度が、レキシントン町に引っ越した日から劇的に変化したわけではない。どちらかというと、これまでの人生で最も孤独を感じたのがこの時期だった。どの国でも「お客さん」のままでたやすく友人ができた私なのに、ボストン近郊のレキシントン町ではそう簡単にはいかなかった。ニューイングランド人特有の内向的な態度が、私にはロンドンや香港で出会った国際色豊かな人々に比べると好奇心に欠け、心を許さず、退屈で付き合いにくいように感じた。過去のオープンでファンキーな友情が恋しくて、レキシントン町を「わが町」と感じる日なんて永遠に来ないと信じていた。

◆◆◆

そんな私が、10年後には町の警部補と顔見知りになり、複数の教育委員から選挙の推薦を頼まれ、行政委員に行政の改革案を提案し、あれほど恐れていた「当番」役を楽しむようになったのだから人生というものはわからない。そのきっかけも受動的なものだった。「不思議の国のアリス」のアリスのように何も考えずに好奇心でウサギを追いかけているうちに、町で起こっている出来事に次々と巻き込まれ、傍観者の立場から物語の一部に引きずり込まれたのである。もちろんそれらの出来事の大部分は楽しいものではない。学校vs両親、旧住民vs新住民、住民税オーバーライド賛成派vs反対派……といった具合に、住民をまっぷたつに分ける問題が殆どだ。中には、全米で話題になった事件もある。私が一番驚いたのは、何かが起こると住民ボランティアたちが即座に集まり、問題解決のために格闘するということだった。スーパーヒーローたちの素顔も、教会の牧師、引退した校長、元NASAのエンジニア、主婦、高校生……と色とりどりである。
「退屈で付き合いにくい」というのは私の大きな誤解で、彼らはニューイングランド流にとても「オープンでファンキー」だったのだ。
次号からは、「わがホームタウン」で私が遭遇した出来事を、内部からご報告しようと思う。

わたなべ　ゆかり・一九六〇年兵庫県生まれ。京都大学医療技術短期大学部卒、同大学部専攻科修了。京都大学医学部付属病院に三年間勤務。その後ロンドン留学、日本語学校のコーディネーター、医療製品製造会社勤務などを経験。二〇〇一年、『ノーティアーズ』で第七回小説新潮長篇新人賞を受賞。二〇〇三年、二作目『神たちの誤算』を発表。現在はボストン郊外レキシントン市で夫と娘の三人暮らし。翻訳やエッセイ執筆の日々を送る。

Inside Apr　Page 7　10/21/10, 10:48 AM Adobe PageMaker 6.5J/PPC

連載

バトル・グリーン

VOL. 2

渡辺 由佳里

「憎しみ」のない町の舞台裏
～前編～

私がレキシントン町の「No Place For Hate（以後NPFHと省略）運営委員会」のボランティア委員をしていることを伝えると、たいていの人は「社会運動かぶれか……」と馬鹿にしたような表情になるか、「私は政治には興味ないから」と耳を覆って逃げだそうとする。

Hate（憎しみ）という単語が含まれているためにラジカルな社会運動団体だと思いこむらしいのだが、とんでもない誤解である。委員には、警察、公立学校、行政委員会、教育委員会など町の公的機関の代表がいるが、この会では職業のタイトルではなくファーストネームで呼ぶ慣わしである。警察の偉い方もそうだが、娘の小学校時代の校長先生をファーストネームで呼ぶのも相当気がひける。最初のうち引退した校長を「ミスター・スミス」と呼ぶたびに「ピーターですよ」と叱られたものである。

公的機関の代表に加えて「町民代表」も参加している。自主参加とはいえ、たいていの委員は町にとって重要な立場にいる人々だ。ジョンさんはタウンメンバー（町議会のようなもの）の議員で、独居老人を医者や買い物に連れて行くサービスや若者のリスク行動を防止するための教育プログラム作りなどのボランティア活動を行っている。黒人女性のフィオナさんは、（レキシントン在住の日本人には馴染み深い）異文化を紹介するお祭り「LexFest」の責任者を務めていて、家系図研究の話題でボストングローブ紙の Living/Artの一面に載ったこともある。その他にも彼女の夫の元NASAエンジニアのチャックさんなど10人を超える各分野の専門家が「お隣りさん」として参加していて、四方山話に耳を傾けるだけで十分勉強になる。

公的機関の代表もここでは「お隣りさん」の立場である。この町で生まれ育った警察代表のジャックさんは、警察ドラマの俳優ではないかと思うほどダブルの背広がよく似合うダンディなアイリッシュで、 彼が語る人間観にはついうっとり聞き惚れてしまう。

私のように委員のひとりに誘われて「NPFH」が何かも知らずにやってきてそのまま居着いた外国人「町民代表」をあたかも最初から参加している委員のように自然に受け入れてくれただけで、彼らは既に「NPFH」を実践していると言えるだろう。

◇

「NPFH」が何かというと、「人々の違いの真価を認め、偏見や差別がないコミュニティを促進する」 ことを目標に「Anti-Defamation League（名誉棄損防止組合）」と「The Massachusetts Municipal Association（マサチューセッツ州地方自治体協会）」が提携して始めた運動のことである。そして、レキシントン町は行政委員が全員一致で可決して「NPFH コミュニティ」になったのである。

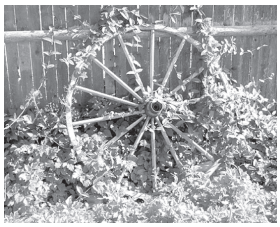
ただし、「NPFH運営委員会とは何ぞや？」という説明になると、正直言って本人たちにもクリアではない。そこで去年このテーマで特別な会議を持った。「啓蒙するための会なのか？」「対策を立てるための会なのか？」「実行委員会なのか？」……。２時間も話し合ったのに結局結論は出なかった。なぜかというと、全部手がけているからだ。警察代表のジャックさんはこう言う。NPFHのコンセプトを地域に広めるための啓蒙と町民の調和を促進する活動を行う「草の根団体」のようなものだから、委員がやる気になれば何でも引き受けていいのではないか。私もそんな風に理解している。

◇

NPFHコミュニティのレキシントン町は、私のような移民にとって住みやすい町である。かつて住んでいたロンドンでは、道で「チンク（中国人の蔑称）」と呼ばれたりして、何度か嫌な思いをしたが、ここではまったくそんな経験はない。中国大陸出身のチェンさんも、合衆国内だけだがコネチカット州ニューヘブン町、カリフォルニア州サンディエゴ市、マサチューセッツ州アンドーバー町などいろいろな場所に住んだことがあるので私に同感する。

「レキシントン町の住民は文化的な問題に敏感で、私を個人として尊敬してくれていると感じます。私の娘たちは自分たちの文化遺産を誇りにしていて、この町はそれを大切にしてくれます」

けれども、たった半世紀前にはレキシントンは今のような町ではなかったのである。（次号につづく）



わたなべ　ゆかり・一九六〇年兵庫県生まれ。京都大学医療技術短期大学部卒、同大学部専攻科修了。京都大学医学部付属病院に三年間勤務。その後ロンドン留学、日本語学校のコーディネーター、医療製品製造会社勤務などを経験。二〇〇一年、『ノーティアーズ』で第七回小説新潮長篇新人賞を受賞。二〇〇三年、二作目『神たちの誤算』を発表。現在はボストン郊外レキシントン市で夫と娘の三人暮らし。翻訳やエッセイ執筆の日々を送る。

Inside May 2　Page 6　10/21/10, 10:54 AM Adobe PageMaker 6.5J/PPC

連載

バトル・グリーン

VOL. 3 渡辺 由佳里

「憎しみ」のない町の舞台裏

～後編～

差別や偏見が少なくて住みやすいレキシントン町の噂を聞いてこの町を選んだアジア系移民は多い。私もそのひとりだ。だが、たった半世紀前にはレキシントンは今のような町ではなかったのである。

◇

第二次大戦後にドイツ系移民のマンさんが住み着いたときには、この町は農業中心で現在多数派の民主党員は彼を含めてたったの４人しかいなかった。また、2000年には人口の約12％を占めるようになったアジア系住民も、約50年前に中国系移民のワングさんがこの町に越してきたときには数人だけだった。ワングさんは、細い道に迷い込んだときに警察官に車を止められ、「まるで犯罪者のように扱われた」と嫌な思い出を語った。

ワングさんたちパイオニアのアジア系移民は、古くからの住民たちに受け入れられるために「Takeだけでなく Giveもしなければならない」と図書館改造の際に資金を集めたり、ボランティアをするなどの努力を重ねてきたが、「Civil Right Movement（黒人公民権運動）の恩恵を受けていることを忘れてはなりませんよ」と歴史的背景の重要さも強調する。両親がキューバからの移民だというディアス（本名）さんは、自分の子供がすばらしい学校生活を送ることができたことへの恩返しとして引退後、教育委員として毎日無償で町のために働いている。

現在の住みやすいレキシントン町に変わるためには、古くからの住民と新たな住民の特別な努力が必要だったのである。

◇

だが、理想郷のそんな背景を、最近越してきたアジア系住民はほとんど認識していないばかりか尊重もしていないように思えてならない。小学校ではアジア系の学生が約３割にまで急増しているというのにアジア系の親のPTAボランティアは少ないままである。町の人口も同様の傾向を示しているが、アジア系のボランティア人口は少ない。NPFH※1などの町の委員会やＰＴＡへのボランティア参加を呼びかけるたびに、「うちの子は学校で困っていないから」、「税金を払っているだけで義務は果たしている」、「町の住民と知り合いにならなくても十分やってゆける」といった、押し売りへの「間に合っています」的返答が戻ってくる。

アジア系の親が「アジア系の学生が多いからレキシントン公立学校は成績が良いのだ」と誇らしげに語るのを何度か耳にしたことがある。この面で町に貢献しているのだから感謝してもらいたいとばかりの言い分だが、低収入の高齢者にとっては公立学校の成績の良さは必ずしも歓迎すべきことではないのである。古くからの住民にとって、「良い公立学校」は、その学校に子どもを通わせるために引っ越してくるアジア系移民の増加を意味し、それは、学生数の増加と教育費の上昇に伴う固定資産税の上昇を意味しているのである。

◇

３年前、私がある行政委員の依頼で町に存在する対立の種類と原因を探る委員会に参加したときのことである。

「これ以上税金が増えたら、もうこの町には住めない」と涙ながらに訴えた老人に続き、チャリティ活動で知られる団体の代表が「ある人々」についての率直な意見を述べてくれた。

「学校のためにこの町に引っ越してきて、われわれ隠居者の税金を使って子どもを学校に通わせ、卒業したら（高い税金を払いたくないから）さっさと逃げてゆく。他人を利用することしか考えていない」

彼が私から視線をそらしていたのは、アジア系移民について語っていたからだと感じた。「当然のようにTakeするがGiveはしなくても良いと思っている」、そんなアジア系移民についてのイメージが定着するといつか不満が噴出するにちがいない……。

今年２月にレキシントン町で起こった事件とその余波は、私の不安をさらに深めた。（次号へつづく）

※1　No Place For Hateの略。「人々の違いの進化を認め、偏見や差別がないコミュニティを促進する」ことを目標に「Anti-Defamation League」が「The Masschusetts Municipal Association」との提携で1999年に始めたキャンペーンのこと。当初NPFHコミュニティ宣言をしたのはマサチューセッツのわずかな市町にすぎなかったが、現在は全米に広がっている。「バトルグリーンVol.2」（『たからまがじん』2007年５月号掲載）をご参照ください。

※文中の登場人物は例外を除いて全て仮名です。（先月号では注釈が抜けていましたが、先月号も同様です）

わたなべ　ゆかり・一九六〇年兵庫県生まれ。京都大学医療技術短期大学部卒、同大学部専攻科修了。京都大学医学部付属病院に三年間勤務。その後ロンドン留学、日本語学校のコーディネーター、医療製品製造会社勤務などを経験。二〇〇一年、『ノーティアーズ』で第七回小説新潮長篇新人賞を受賞、二〇〇三年、二作目『神たちの誤算』を発表。現在はボストン郊外レキシントン市で夫と娘の三人暮らし。翻訳やエッセイ執筆の日々を送る。

Inside June　Page 6　10/21/10, 11:00 AM　Adobe PageMaker 6.5J/PPC

連載

バトル・グリーン

VOL. 4

渡辺 由佳里

ヘイトクライムの多面性
～前編～

３月上旬、私はNPFH※1運営委員長からのＥメールでレキシントン町の中心街で起こった次の事件を知った。

ある中国系の女性がランチタイムに歩道を歩いていたところ、見知らぬ男に人種を侮辱する言葉を投げかけられた彼女が振り返って言い返したところ、男は彼女に唾を吐きかけ、地面に殴り倒した。もみ合っている男女を見た男性２人と女性１人が駆けつけて引き離すと、加害者は近くの建物に逃げ込んだ。警察は加害者を探し出して逮捕し、暴行と「ヘイトクライム」※2の容疑で逮捕した。

◇

私は、「これまで表面化していなかったアジア系住民への憎しみが噴出したのだろうか？」と不安になった。しかし、報告を読み進めるにつれてこれが単純な人種差別事件ではないことを悟り、ほっとすると同時に複雑な気分になった。

加害者はホームレスで、しかも精神障害の可能性があるということだった。もしそれが真実であれば、住民の感情を反映したヘイトクライムではないが、ニュースが広まるとホームレスや精神障害者への差別や偏見を増悪させ、新たなヘイトクラムが生まれるかもしれない。

数日後の「NPFH運営委員会」の会議でも、複数の委員が私と同様の懸念を口にしたのだが、出席した４人の中国系移民たちの態度はまったく異なるものだった。彼らには「人種差別」の側面しか見えないようなのである。

特に、香港出身のコニーさんの反応は極端だった。警察の説明が終わるやいなや、彼女は声を張り上げて誰ともなしに怒りをぶつけ始めた。

「なぜ被害者は自分の名前を伏せるの？被害者の彼女が先導して差別の実態を訴えるべきじゃないの！」彼女は、引き続き自分の受けた差別の数々を挙げ、この事件を反差別運動のきっかけにするべきだと主張した。

町や警察が何もしなかったというならば、コニーさんの怒りも納得できる。だが、レキシントン町は次のように事件に速やかに対応しているのである。

まず「NPFH運営委員会」の特別組織「インシデント対策チーム」は、警察との連携で次の対策を取った。１）被害者の許可を得たうえで、町の中国系移民の会に連絡を取り、被害者の支援を求めた。２）住民に正しい情報を提供するために、被害者の意向により名前を伏せて新聞報道を行った。３）町の中国系アメリカ人会と多くの中国系移民が属しているバイブル教会に連絡を取り、「NPFH運営委員会」のミーティングへの参加を求めた。そして、次の対策を練るためのこの会議である。

これ以上何をするべきだと言うのだろう？

◇

出席者を見渡すと、みな礼儀正しく拝聴しているが居心地悪そうな表情を浮かべている。

実は、コニーさんは数ヶ月前に突然「NPFH運営委員会」の会議の席に現れ、山積みの議題を無視して自分が差別を受けた体験を一方的に訴え続けた人物なのである。その日彼女は、アーリントン町の公園では白人の年配の女性に、レキシントン町の小学校と中学校では生徒から差別的な扱いを受け、それを訴えた校長や警察からも邪険にされたと訴えた。だが、その一方で「レキシントンには労働者階級が少なくて知識層が多いから他の町よりもまし」と平然と言ってのけ、同席していた行政委員の１人が苦笑しつつ「これから私は労働者階級の仕事に出かけなくちゃならないんでお先に失礼します」と逃げ出したくらいである。

テーブルを見渡すと、この日も常連の委員たちは一様に複雑な表情を見せている。

コニーさんが「アメリカでは黒人公民権運動で得た人権があるのよ！アジア人だから何をやってもおとなしくがまんすると思わせていることはないわ」と声をはり上げると、長年のメンバーで黒人のチャックさんがついに席を離れた。祖父が奴隷だったという彼にとって、公民権運動とこの事件を同等に扱われるのは我慢できなかったのではないだろうか。

アジア人のひとりとしていたたまれない気分になった私は、コニーさんを遮ってこう言った。

「これは住民の偏見を反映したヘイトクライムではありません。警察も町も速やかに対応しています。状況を改善するためにわれわれが何をできるのか、具体的な提案をするほうが効率的だと思うのですが」

けれども、私がもっとはっきり伝えたかったのは、アジア系移民の利己主義への歯がゆさである。

NPFH運営委員長がこれまで何度誘っても、中国系移民の会の代表者は、学校での特殊教育児童に対する差別、同性愛者に対する宗教グループの圧力、高齢者と若年層を繋ぐプログラム、多宗教が連携するプログラムなどを語り合う会議には参加してくれなかったのである。

私がこのとき予想したとおり、議題が異なる翌月の会議ではこの会に参加した４人は姿を見せなかった。（次号につづく）

※1　No Place For Hateの略。「人々の違いの真価を認め、偏見や差別がないコミュニティを促進する」ことを目標に「Anti-Defamation League」が「The Masschusetts Municipal Association」との提携で1999年に始めたキャンペーンのこと。当初NPFHコミュニティ宣言をしたのはマサチューセッツのわずかな市町にすぎなかったが、現在は全米に広がっている。「バトルグリーン Vol.2」(『たからまがじん』2007年５月号掲載）をご参照ください。

※2　ヘイトクライム（Hate crime、あるいはBias crime）とは、ある人種、宗教、性愛の有様など異なる「集団に対する偏見・差別・蔑視」感情などが元で起こされる犯罪行為、とくに暴行、脅迫、殺人などの暴力犯罪を指す。（ウィキペディア）

※文中の登場人物は例外を除いて全て仮名です。

わたなべ　ゆかり・一九六〇年兵庫県生まれ。京都大学医療技術短期大学部卒、同大学部専攻科修了。京都大学医学部付属病院に三年間勤務。その後ロンドン留学、日本語学校のコーディネーター、医療製品製造会社勤務などを経験。二〇〇一年、『ノーティアーズ』で第七回小説新潮長篇新人賞を受賞。二〇〇三年、二作目『神たちの誤算』を発表。現在はボストン郊外レキシントン市で夫と娘の三人暮らし。翻訳やエッセイ執筆の日々を送る。

Inside 7/8　Page 7　10/21/10, 5:33 PM　Adobe PageMaker 6.5J/PPC

連載

バトル・グリーン

VOL. 5 渡辺 由佳里

ヘイトクライムの多面性
～後編～

住民間の「ヘイト*1」を生み出すものは何か？

約5年前、私はレキシントン町の行政委員の委託でこれらを調査し建設的な対話への対策を提案するボランティアグループに参加した。私以外の委員は大学の社会学の教授や元教育委員、引退した企業の重役などで町のボランティア歴も長い。PTA程度の経験しかない私がこのようなグループに誘われたのは、行政委員が移民の観点を取り入れたいと願ったからである。

この委員会を含むボランティア経験から私が学んだのは、少なくともレキシントン町では「肌の色や英語の訛りといった表面的な差異に基づく偏見、他文化への無理解、白人優位主義がヘイトを生み出すと単純に結論づけるのは過ちである」ということだった。この町の軋轢や対立の多くは、むしろ個人の価値観の差から生じているのだ。

◇◆◇

この町で町民の対立が際立つのは、「Override（オーバーライド）」住民投票前の数ヶ月である。YES（賛成）派対NO（反対）派のキャンペーンが激しくなるにつれ、対立する派を中傷するチラシがまかれ、自宅の前に掲げたサインが盗まれ、隣人同士が怒鳴り合う不愉快な小事件が多発する。

このオーバーライドとは、固定資産税の値上がりを年2.5%以内に押さえる（もっと複雑なのだが割愛する）というマサチューセッツ州が定めた「Proposition 2 1/2」という条例を各自治体の住民投票で無効にし（Override）、税収入を増やして必要な出費をまかなうことである。

日本人の私たちにとって驚きなのは、地方自治体の行政費の大部分が自給自足であり、特に公立学校の運営費が町全体の歳出で大きな割合（レキシントン町では6割前後）を占めていることである。しかも、レキシントン町は住環境を優先して商・工業用地を限定しているので歳入のほとんどを町民の固定資産税に頼っている。問題は、光熱費、健康保険を含む教師の人件費、特殊教育費の上昇により、過去には校舎の修復などの特別なときにだけ必要だったオーバーライドが現在ではほぼ毎年必要になっていることだ。

オーバーライド賛成派と反対派の衝突の原因は価値観の違いにある。まず両派では公立学校のあるべき姿と最低基準が異なる。賛成派は、「公教育は民主主義でもっとも重要な部分であり、町はすべての生徒に才能を発揮できる教育の場を与える義務がある」と考えるが、反対派からよく聞く反論は、「公立学校は読み書きを教えればよい。音楽や芸術を学ばせたいのならば私立学校に通わせるべきだ」というものである。次に教育の優先度も異なる。高齢者が多い反対派が求めるのは「教育重視の町」ではなく「住民が公共に奉仕し、互いに助け合う」昔ながらの町である。また質素倹約を美徳として育った彼らは、公立学校が無駄遣いをするからオーバーライドが必要なのだと信じるきらいがある。

◇◆◇

町の人口統計上の変化も住民感情に影響を与えている。

つい最近まで、レキシントン町では教師や警官が引退して家を売るときには地元の若い教師や警官がそれらを購入したものである。ところが、2004年にはレキシントンの一軒家の平均販売価格は83万2千ドル（約9千万円）に上昇し、町で働く若い教師や警官の給料でこれらの家を購入することは不可能になった。

彼らのかわりにそれらの家を購入しているのが、優れた教育を求めるアジア系移民と高収入の若い夫婦である。彼らは自分の収入とわが子の成績に直結する活動には労力を費やすが、これまで地元出身者が進んで引き受けてきたサッカーのコーチやPTAといったボランティアには尻込みする傾向がある。オーバーライド賛成派の中心人物たちは学校や町のボランティアを誰よりも多くこなしているのだが、反対派の旧住民たちの目に入るのは「わが子をよい大学に入れたい利己主義の親」だけであり、「そんな者のために高い税金を払いたくない」という反感が強まるのである。

◇◆◇

知人でユダヤ人の元教育委員が自宅の前庭にオーバーライド賛成のサインを立てていたところ、隣人に「この町の公立学校の成績がよいのは単にユダヤ人と中国人が多いから。学校にかける金額は関係ない」と怒鳴られた。最初にこの話を聞いたときはショックだったが、そのうち、この差別的な発言には、自分たちの経済・社会・文化的遺産を受け継ぐ者を追い出した新住民のために生活を切り詰めて高い税金を払わなければならない憤りが込められているのではないかと思うようになった。

だからこそ、先月号で香港出身のコニーさんが主張したように真っ向から「人種差別だ！」とこれらの人々を糾弾するのは見当違いなだけでなく効果がないのである。なぜなら、このヘイトは特定の人種への偏見というよりも、ある集団が代表する価値観の差に対するヘイトなのだから。

※1　憎しみ(Hate)。ここでは、ヘイトクライムの元となる偏見、差別、蔑視といった感情を指す。ヘイトクライム（Hate crime、あるいはBias crime）とは、ある人種、宗教、性愛の有様など異なる「集団に対する偏見・差別・蔑視」感情などが元で起こされる犯罪行為、とくに暴行、脅迫、殺人などの暴力犯罪を指す（ウィキペディア）。前編「バトルグリーンVol.4」(『たからまがじん』2007年夏号掲載)をご参照ください。

※　文中の登場人物は例外を除いて全て仮名です。

わたなべ　ゆかり・一九六〇年兵庫県生まれ。京都大学医療技術短期大学部卒、同大学部専攻科修了。京都大学医学部付属病院に三年間勤務。その後ロンドン留学、日本語学校のコーディネーター、医療製品製造会社勤務などを経験。二〇〇一年、『アーティアーズ』で第七回小説新潮長篇新人賞を受賞、二〇〇三年、二作目『神たちの誤算』を発表。現在はボストン郊外レキシントン市で夫と娘の三人暮らし。翻訳やエッセイ執筆の日々を送る。

Inside Sep.　Page 7　10/23/10, 2:46 PM　Adobe PageMaker 6.5J/PPC

バトルグリーン／連載エッセイ6

価値観の衝突

渡辺 由佳里

ヘイトを生み出す価値観の差について先月号で語ったが、私たち日本人がことに理解に苦しむのが「family value」という価値観である。

ニュース番組でよく耳にするこの用語は、直訳すると「家族の価値観」で善良なイメージだが、単純な邦訳がはばかれるほど危険な政治的・社会的コンセプトを含んでいる。

この用語をもっとも活用しているのは米国のキリスト教保守派と彼らを支持基盤とする共和党保守派の政治家であろう。現代社会に蔓延する問題を解決するためにキリスト教に基づいた伝統的な道徳観、すなわち「family value」を見直すべきだという彼らの主張は、もっともなことに聞こえる。だが、これには公立学校での聖書の教育と祈祷を許可し（最終的には義務化が目標）、生物学で「進化論」ではなく神が世界を創造したという「創造論」を教え、堕胎を違法化し同性愛を社会から追放することなどが含まれているのである。

反対に、リベラルにとっての「family value」は育児施設の普及や産休の徹底、シングルペアレントや同性カップルを伝統的な夫婦と同等の立場にすることであり、同じ言葉でも価値観は徹底的に異なる。

当初は私も「和」を重んじる典型的な日本人として、「それでもふたつのグループが円満に共存する方法はあるだろう」と信じていた。だが、ときには、町がひとつの価値観を選択し、その価値観を守るために相反する価値観と一致団結して闘うことも必要なのである。それを私に実感させてくれたのが、私の娘の母校エスタブルック小学校を舞台にした事件であった。

新聞やテレビ番組で取り上げられ全国的に有名になった「エスタブルック事件」について“事実”を伝えるウェブサイトは数多いが、ほとんどが前述のキリスト教保守派によるもので、事実とはほど遠い。従って、本誌では小学校の保護者が中心になって結成した「LexingtonCARES」というグループが公表する情報を中心に、当事者から私が直接入手した情報と私個人の体験を加えた「エスタブルック事件」についてお話しようと思う。

＊＊＊

二〇〇五年四月二十九日の早朝、私はボストングローブ紙の地域版を見て、一瞬目を疑った。レキシントン町のエスタブルック小学校で、幼稚園児の父親が不法侵入罪で逮捕され、一晩拘留されたというのだ。

新聞から私が読み取ったのは次のようなことだった。

去年ニュージャージー州から引っ越してきたばかりのパーカー夫妻は、エスタブルック小学校の幼稚園に通っている息子が学校から持ち帰った「ディバーシティ・バッグ」に入っていた「Who's in the family?（家族には誰が含まれている?）」という本の「同性愛」に関する内容に不安を覚えた。学校に何度か懸念を伝え、校長と町の教育長と2時間にわたる話し合いを持ったが、納得する回答を得られなかったためにその場を立ち去るのを拒否したところ警察に逮捕された。逮捕されたディヴィッド・パーカー氏は、この本で取り上げられている「同性結婚」などという「成人向け」のテーマを教えるタイミングは親の自分が決めるべきであり、学校での会合の目的は「息子がさらにゲイ家庭についての本や授業に暴露される懸念」だったと述べ、「私はただ、良い父親であろうとしただけ」とコメントしている。また、同性結婚に反対の立場を取るモルモン教徒のロムニー知事は、この特定の件に関するコメントは避けたものの、「法では、人の性に関連する事柄を教室で教えるときには親に通知しなければならず、親はその授業のあいだ子供を教室から離れさせることを選べる」そして「親の知る権利を支持する」と婉曲的にパーカー夫妻をサポートするニュアンスを含ませた。

＊

私は記事を読み終わった後も唖然として紙面を見つめていた。

これだけ読むと、まるでレキシントン町やエスタブルック小学校が親に内緒で「行き過ぎた性教育」を行っているみたいではないか！

実は、私は娘が卒業した1年前までこの記事に登場する「ディバーシティ・バッグ」を作った「anti-bias committee(反偏見委員会)」の一員だったのである。私たちがこのディバーシティ・バッグを作ったのは、アメリカで“普通”の家族とみなされている「白人・キリスト教・父親と母親がそろっている」家族だけが“普通”ではなく、すべての家族が“普通”である、というレキシントン公立学校の信念を小学校のコミュニティ全体に普及させ、どんな家族を持つ子供であっても差別されたり虐められたりすることがない環境を作り上げるためだった。バッグには、ユダヤ教徒とキリスト教徒の家族が理解し合うようになる心温まる話や多文化の料理レシピなど子どもの発育年齢に合わせたレベルの本が数冊入っていて、希望する子どもだけがバッグを家に持ち帰り、両親と一緒に読んで感想を話し合う。持ち帰りにしたのは、子どもだけでなく親にもこの信念を理解してもらうためだった。パーカー夫妻が問題にした「Who's in the family?」という本は、他民族の家庭や母子・父子家庭、外国からの養子、そして「ふたりのお母さん」といったエスタブルックに実際存在する多様な家族のことを、「こんな家族もいるのですよ」と紹介する絵本にすぎない。彼らが「成人向けのテーマ」だと指摘したページにしても、二人の女性が子供たちと一緒に庭で飼い犬を洗っているのと、二人の男性が少女と夕飯の支度をしているイラストで、どこにも「同性愛」を語る文章はみられない。しかも、学校が始まる前に、このバッグを持ち帰る義務がないことは書面でパーカー夫妻を含む全ての親に通知していたのである。

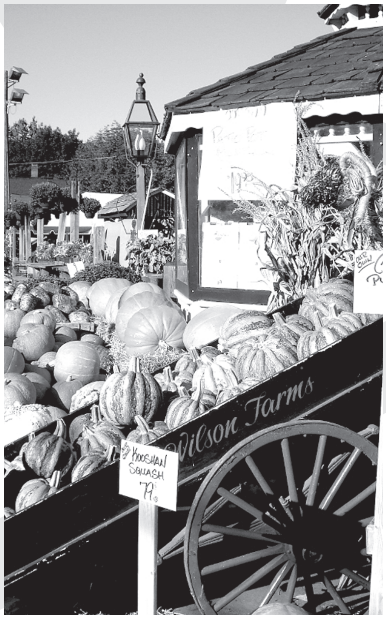
＊

実は、「性教育」にはまったく無関係なこの本が逮捕劇にエスカレートしたのは、偶然ではなかったのである。（次号につづく）

＊新聞などで既に公表されている固有名詞は実名（カタカナ表記）を、その他の人物はプライバシーを保護するために仮名を使っています。

プロフィール

わたなべ　ゆかり・1960年兵庫県生まれ。京都大学医療技術短期大学部卒、同大学部専攻科修了。京都大学医学部付属病院に三年間勤務。その後ロンドン留学、日本語学校のコーディネーター、医療製品製造会社勤務などを経験。2001年、『ノーティアーズ』で第七回小説新潮長篇新人賞を受賞。2003年、二作目『神たちの誤算』を発表。現在はボストン郊外レキシントン市で夫と娘の三人暮らし。 翻訳やエッセイ執筆の日々を送る。



Inside Oct　Page 2　10/23/10, 2:49 PM　Adobe PageMaker 6.5J/PPC

バトルグリーン／連載エッセイ7

エスタブルック事件の真実

渡辺 由佳里

BATTLE GREEN

二〇〇五年四月二十七日にエスタブルック小学校で起こった出来事(*註1)は、偏った「価値観」、つまりイデオロギーによって大きく歪められた形で全国に伝わった。

その発信源である宗教保守派団体「Article 8 Alliance」による事件の《真実》はこうである。

「デイヴィッド・パーカーは、彼の息子が通う小学校で、学校の同性愛カリキュラム教材に異議を唱えるために校長と町のDirector of Education(*註2)と会合を持っていた途中、不法侵入罪で逮捕された。パーカーは、息子の幼稚園のクラスでの同性愛カリキュラムや大人による(同性愛に関する)臨機応変のディスカッションを(彼ら両親に)通知し、息子のそれらへの参加を拒否する選択権を求めていた。彼は数ヶ月に及ぶ(学校との)対話で繰り返し『それは不可能』と申し渡され、ついにこれが解決するまで会合を立ち去らないと言った。逮捕後、彼は拘置所で一夜を過ごした」

‡‡‡ж‡‡‡

「Article 8 Alliance」は、パーカーのことを「行き過ぎた性教育からわが子を保護したい」という純粋な要望を持つ親のシンボルとして描写し、彼は「人の性に関連する事柄を教室で教えるときには親に通知しなければならず、親はその授業のあいだ子供を教室から離れさせることを選べる」というマサチューセッツ州の法律に準じた親の権利を行使しようとしただけだと伝えている。また、エスタブルック小学校と学校関係者は、法で保護されている親の権利を無視する左よりのイデオロギーに偏った集団として描かれている。

インターネットに蔓延するエスタブルック事件の情報は、「Article 8 Alliance」とパーカー自身の情報を基にしているために、まったく同じ内容である。何も知らない人がエスタブルック事件をインターネットで調べたとしたら、これが《真実》だと信じるに違いない。

‡‡‡ж‡‡‡

だが、レキシントン公立学校の保護者が中心になって結成された「Lexington C.A.R.E.S.」とレキシントン公立学校教育長とレキシントン警察長の共同声明による《真実》は、似ているようで根本的な部分が決定的に異なる。

まず、宗教保守派とパーカーがやり玉に挙げている「同性愛カリキュラム」と「性教育」とは、先月号で説明したとおり、「Who's in the family?」という絵本のことである。他民族の家庭や母子・父子家庭、外国からの養子、同性の両親といった多様な家族を平等に紹介しているだけの本を「同性愛カリキュラム」と呼ぶのは誇張というより創作である。また、彼らが意味する「同性愛カリキュラムや大人による(同性愛に関する)臨機応変のディスカッション」には、同性の両親を持つ子供が教室で家族の写真や絵を紹介したり、家族についての作文を発表したりすることも含まれるのである。

学校関係者がパーカー夫妻に数ヶ月にわたって何度も辛抱強く説明してきたのは、パーカー夫妻が「同性愛教育」と呼ぶアクティビティはマサチューセッツ州の法律が定める「性教育」には匹敵しないということである。また、このように小学校では日常のアクティビティのたびに彼らの息子を教室外に連れ出すためには追加の教員を配置する必要があり、現実的に実行可能ではない。それより教師たちが問題視したのは、「同性の両親を持つ子供が家族について語るたびに同級生が席を外すのを許可するのは、語っている子どもの家族が《普通》ではなく、差別してよいというメッセージを教師が子どもに教えるのと同じ」ということだ。

‡‡‡ж‡‡‡

逮捕のいきさつについても真実は異なる。

パーカー氏が学校関係者と会合を持ったのは午後三時前後であり、その後彼が校舎から立ち去ることを繰り返し拒否したために午後五時二十分に私服警官が二人、午後六時に警部補が加わって説得にあたった。妻は説得に応じて校舎を去ったが、夫は学校を閉める時間を過ぎても立ち去りを拒否し「逮捕されないのであれば、私はこの場を去らない"If I'm not under arrest then I'm not leaving."」と警部補に宣言し、そのために六時二十四分に不法侵入罪で逮捕されたのである。

また「Article 8 Alliance」は、警察はパーカーが弁護士と連絡を取ることを許可しなかったと書いているが、説得の途中でパーカー氏は何度も携帯電話を使っている。相手が弁護士ではなかったのなら、いったい誰に電話をかけていたのだろう?

その答えは、「Article 8 Alliance」のウェブサイトに載っている。

小学校の前にパトロールカーが駐まっている写真には「会合の途中、ディヴィッド・パーカーを逮捕するために警察官が現れた」というキャプションが付いており、別の写真は、逮捕されたパーカー氏が警察の建物の裏口から入る場面である。

普通の親がわが子のことを相談するために学校を訪問したのであれば、このような写真が存在する筈はない。写真を撮ったのはパーカーが電話で呼び出した「Article 8 Alliance」のメンバーたちだったのである。

‡‡‡ж‡‡‡

なぜパーカーはわざわざ逮捕されることを選んだのか? なぜわずかな金額の保釈金を払わずに拘置所で一夜を過ごすことを選んだのか?

それについては、次回で詳しくお話しよう。(次号につづく)

プロフィール

わたなべ　ゆかり・1960年兵庫県生まれ。京都大学医療技術短期大学部卒、同大学部専攻科修了。京都大学医学部付属病院に三年間勤務。その後ロンドン留学、日本語学校のコーディネーター、医療製品製造会社勤務などを経験。2001年、『ノーティアーズ』で第七回小説新潮長篇新人賞を受賞。2003年、二作目『神たちの誤算』を発表。現在はボストン郊外レキシントン市で夫と娘の三人暮らし。翻訳やエッセイ執筆の日々を送る。

註1　下記の「エスタブルック事件参考サイト」、『たからまがじん』2007年10月号をご参照ください。

註2　「Article 8 Aliance」のサイトではこのように表現されているが、正しい役職名はDirector of Curriculum and Instruction for the Lexington Public Schools（カリキュラムおよび教育指導長）

※文中の固有名詞は新聞などですでに公表されており、ここでも実名を用いています。

エスタブルック事件参考サイト

【LexingtonC.A.R.E.S.、レキシントン公立学校教育長、レキシントン検察長による共同声明】
http://www.lexingtoncares.org/LPSPressRelease2005-05-02.pdf

【LexingtonC.A.R.E.S. による記事】
HYPERLINK "http://www.lexingtoncares.org/LearnTheFacts.html" http://www.lexingtoncares.org/LearnTheFacts.html

【Article 8 Alliance による記事】
HYPERLINK "http://www.article8.org/docs/news_events/parker/main.htm" http://www.article8.org/docs/news_events/parker/main.htm

Inside Nov.　Page 2　10/23/10, 2:52 PM　Adobe PageMaker 6.5J/PPC

バトルグリーン／連載エッセイ８

エスタブルック事件の策略

渡辺 由佳里

二〇〇五年春、レキシントン町エスタブルック小学校で幼稚園児の父親ディヴィッド・パーカーが「同性の両親がいる家族」を紹介する本とクラスのディスカッションに抗議し、学校と警察の説得にもかかわらず立ち去りを拒否、不法侵入罪で逮捕される事件があった。(＊註1)だが、関係者の証言から、このショッキングな事件が決して偶発のものではなく、逮捕された父親自身の策略だったことが明らかになってきた。

☆☆☆

私の娘が通っていたころのエスタブルック小学校は、アジアのみならずヨーロッパ諸国や中近東からの移民の子弟が多く、国際的で和気藹々とした雰囲気であった。それぞれがお国自慢の料理を持って集まるインターナショナル・ポットラックディナーでは折り紙指導やインドのダンスなどなど家族ぐるみの交流があり、同性カップルの母親がＰＴＡの副会長を務め、都市部からのマイノリティの生徒を放課後にボランティアで指導する教師が地域で最も多い、という「反偏見」を重視するコミュニティが確立していた。

私はコミュニティの調和を重視するエスタブルック小学校の特性を知っているがゆえに、小学校が父親の要望を頑なに退けて警察に逮捕を要請したというパーカーの言い分に疑いを抱いたのである。

☆☆☆

事件に詳しい学校や警察関係者からの情報からは、この逮捕劇が、パーカーが同性結婚の合法化に反対する「Article 8 Alliance」と手を結んで仕組んだ《反同性愛》キャンペーンであり、エスタブルック小学校、レキシントン公立学校、レキシントン警察は、彼らが宣伝に利用した道具に過ぎなかったことが推察できる。(＊註2)

パーカーは「幼稚園児の父親の逮捕・拘留」という衝撃的なタイトルをマスコミが無視する筈はないと知っていたので、まずエスタブルック小学校校長と公立学校の代表者との会議中に宗教保守派の「Article 8 Alliance」と連絡を取り、逮捕の場面を写真とビデオで記録させた。そして、ごくわずかな保釈金を払わずに拘留されることを選び、「Article 8 Alliance」から地方の報道局に釈放の時間と場所を連絡させたのである。

☆☆☆

残念ながら、パーカーの策略は大成功だったというしかない。

地方のニュース番組は「Article 8 Alliance」からの連絡に応じて釈放の場面を繰り返しニュースで流し、その夜には地方と提携している全国版のニュース番組がこの事件を報道した。このセンセーショナルな話題をボストングローブ紙の特集や、ABC, CNN, FOXの人気番組が次々に取り上げたために、瞬く間にエスタブルック小学校事件は全国的な論争的になった。特に、極端に保守的なFOXの「The O'Reilly Factor」がパーカーを英雄的な父親として招待した直後には、パーカーに同意するサイトが雨後の竹の子のように現れ、以前にはGoogleで二十程度しかなかった「エスタブルック小学校」の検索結果は、数千から数万に膨らんだ。このようにして、一般人から支持されやすいようにパーカーがわざと簡潔に歪めた「学校での行き過ぎた同性愛教育を拒否する権利は親にある」というメッセージは瞬く間に全米のみならず海外にまで広がり、校長や教育長のもとには毎日数百の嫌がらせメールが届き、深夜に海外から脅迫電話までかかるようになった。

☆☆☆

レキシントン町でも「同性愛なんて話題を小学校で教えないで欲しい」という意見を、特にアジア系の親から耳にしたが、大部分の町民の意見は、「全ての子供を平等に扱うという学校の対応は正しい。宗教的倫理に沿った教育を求めるのであれば、それを与えてくれる宗教系の私立学校に送ればよい」というものであった。

しかし、冷静な町の対応にもかかわらず問題はそう簡単に解決の方向には向かわなかった。

不法侵入罪の被告であるパーカーが、マスコミを使ったＰＲ作戦を展開する一方で法的な反撃に出たのである。

最初の事件から約一年後、エスタブルック小学校反偏見委員の教師が二年生の授業中に生徒の要望で『King and King』(＊註3)という絵本を読んだことに対し、パーカー夫妻はもう一組の夫婦と共同で、レキシントン町、エスタブルック小学校の校長、教師、教育長、教育委員、教育指導長、保健コーディネーターを訴えたのである。訴訟の理由は、親が非倫理的だとみなす《生活習慣(同性愛および同性カップル)》を子供に教え込み、州の法律を破り、親の人権を侵害したというものであった。

☆☆☆

訴訟の直前に就任した教育長のポール・アッシュは、エスタブルック事件には直接関わっていなかったのだが、即座に「学校は違法なことは何もしていない」という声明を出し、地方裁判所に訴訟の却下を求めた。法的根拠がないためにパーカーが裁判に勝つ可能性はほとんどなかったのだが、訴訟が町と学校に与えた影響は大きかった。

まず、いったん訴訟になると法的な手続きが必要になり、町は費用を負担しなければならなくなる。また、訴訟に対応するために校長たちが業務に割く時間が大幅に削られる。マスコミへの対応も無視することができない。その結果、特殊教育を必要とする生徒を含め生徒全員が十分な対応をしてもらえず、かつてMCAsで常に州の上位にランクされていたエスタブルック小学校の順位は下降した。

この不安定な状況は、町民の感情をも不安定にし、潜在していた不満を噴出させるきっかけになったようである。最初は学校を全面的にサポートしていた町民の間に『King and King』を読んだ教師に対して「なぜこんなときに扇動的なことを?」という反感が生じ、成績を重視する父兄は学校への不満を口にし、これまで沈黙を守っていた信心深いキリスト教徒たちが公立学校でのリベラルな環境に不満を訴えるようになったのである。(次回につづく)

プロフィール

わたなべ　ゆかり・1960年兵庫県生まれ。京都大学医療技術短期大学部卒、同大学部専攻科修了。京都大学医学部付属病院に三年間勤務。その後ロンドン留学、日本語学校のコーディネーター、医療製品製造会社勤務などを経験。2001年、『ノーティアーズ』で第七回小説新潮長篇新人賞を受賞。2003年、二作目『神たちの誤算』を発表。現在はボストン郊外レキシントン市で夫と娘の三人暮らし。翻訳やエッセイ執筆の日々を送る。

註1　下記の「エスタブルック事件参考サイト」、『たからまがじん』2007年10月号・11月号をご参照ください。

註2　これらの推察は、レキシントン公立学校と警察関係者のオフレコの情報をもとにしているために、アイデンティティが判明する表現を避けています。

註3　オランダ原作の子供用の絵本。母親から早く結婚するよう迫られている王子が、候補の美しい姫君たちを退けて他国の王子と恋におち、結婚するという物語。

エスタブルック事件参考サイト

【LexingtonC.A.R.E.S.、レキシントン公立学校教育長、レキシントン検察長による共同声明】http://www.lexingtoncares.org/LPSPressRelease2005-05-02.pdf

【LexingtonC.A.R.E.S. による記事】HYPERLINK "http://www.lexingtoncares.org/LearnTheFacts.html" http://www.lexingtoncares.org/LearnTheFacts.html

【Article 8 Alliance による記事】HYPERLINK "http://www.article8.org/docs/news_events/parker/main.htm" http://www.article8.org/docs/news_events/parker/main.htm

Inside Dec　Page 2　10/28/10, 11:11 AM　Adobe PageMaker 6.5J/PPC

バトルグリーン／連載エッセイ9

エスタブルック事件の余波

渡辺　由佳里

これまでのいきさつ
レキシントン町、エスタブルック小学校で実際に起こった一連の事件について、三回にわたり紹介してきた。「同性の両親がいる家族」を紹介する本と、同テーマを扱った授業中のディスカッションについて、幼稚園児の父親ディヴィッド・パーカーが抗議、学校からの立ち去りを拒否したため不法侵入罪で逮捕されたことが事件の発端となった。前号では、同校二年生の担任が、二人の王子が結婚する絵本「King and King」を授業中に読んだ件で、パーカーが町や公立学校を訴えたことを紹介した(＊註1)。これらの事件は、人気テレビ番組やインターネットで論争の的になり、学校関係者のもとに嫌がらせのメールや電話が殺到するようになった。

リベラルなマサチューセッツ州の中でもリベラルに偏っているというイメージがあるレキシントン町だが、政治的に保守的な古株の住民に加え、聖書に忠実なキリスト教徒のアジア系移民も少なくなく、タイム誌に登場した宗教右派の福音派教会もある。このグレースチャペル教会の人気ぶりは、交通整理の警察官が必要になるほどの週末の大渋滞で一目瞭然だ。百以上の中学生信者を対象にしたロックミュージック礼拝があり、日曜の朝だけでは信者をまかないきれずに土曜を含め複数の礼拝を行うというのは、巨大教会が珍しくないバイブルベルト地域(＊註2)ならまだしも、ボストン近郊では驚異的な現象である。

§§§

エスタブルック事件は、宗教保守派の住民とリベラルな住民の間に既に存在していた潜在的な不調和を表面に浮き上がらせるきっかけにもなったようである。

事件のほとぼりがさめないある日、グレースチャペル教会と同じ通りにあるレキシントン高校で、恒例の「沈黙の日(Day of Silence)」のイベントが行われた。これは、一九九六年にヴァージニア大学の学生が企画して始まった学生の手による全国規模のプロジェクトで、現在は「ゲイ・レズビアン・ストレート教育ネットワーク(GLSEN: Gay, Lesbian & Straight Education Network)」と「全米学生協会(the United States Students Association)」が共同主催している。この日は、差別や暴力を恐れて沈黙を虐げられているゲイやレズビアンの学生への共感と同情を示すために、賛同する学生と教師は一日を沈黙で過ごす。沈黙の日に引き続いて行われるディスカッションも含め、レキシントン高校ではこの行事で問題が生じたことはかつて一度もなかった。

しかし、この年は様相が異なった。

沈黙の日の朝、《同性愛に反対する親》と自称する大人たち（実際にはよその町から来た者が多かった）が、学校の敷地内にプラカードを持って現れた。校長のジョーンズは敷地からの立ち去りを求めたが、彼らは学校のすぐ外に移動してデモを続け、彼らに挑発された高校生との間の口論が小競り合いにエスカレートした。校内でもかつてない緊張感が生じていた。男女が手を繋いだイラストに「こうあるべきだ」とコメントしたスティッカーを胸に貼り無言の抗議運動を行う学生と、「沈黙の日」を支持する学生たちの間に敵対心が募っていたのである。

ある宗教保守派の知人は、無言の抗議運動は「リベラルな雰囲気の学校で沈黙を強いられてきた信心深い生徒たちのささやかな反発」と説明してくれた。キリスト教の教えに従い「結婚は男女間だけのもの」と信じる彼らは、同性愛を支持しないと非難される雰囲気の学校では、自分の信念と価値観を否定されているように感じるというのだ。しかし、「沈黙の日」に参加した学生の反応は、「これは抑圧されている者への共感を示す日で、共感しない者を非難するためにあるのではない。それなのに、なぜさらに同性愛を攻撃するのか」という反感のみであり、両者の隔たりはかえって広がった。

§§§

このような町民の不調和につけ込むかのように、白人優越主義者団体たちがレキシントン町にやってきた。

アーカンソー州に本部を持つ差別団体の「ホワイト・レボリューション（以降W.Rと省略）」が、エスタブルック小学校で「エスタフェスト」という資金集めのイベントが行われる日に、「独立戦争の勃発地レキシントン町で全国の白人優越主義者団体に革命を呼びかける」集会を行うことを宣言したのである。

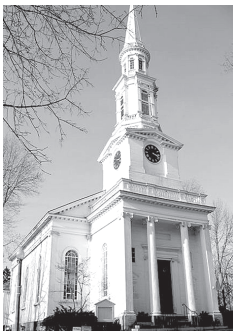
レキシントン警察によると、W.Rがレキシントン町を選んだのは移民やユダヤ人が多いので挑発しやすいという理由に過ぎなかったのだが、エスタブルック事件を知るやいなや、彼らはこれをインターネットでの宣伝に利用し、メディアの注目を集めることを狙った。

§§§

W.Rに引き続いてレキシントン町をターゲットにしたのは、ヘイトグループ（差別団体）として悪名高い「ウエストボロー・バプティスト教会（以降WB教会と省略）」であった。WB教会は、リンチで殺害されたゲイの少年マシュー・シェパード（映画「ララミー・プロジェクト」の元になった事件）の葬式で、「神よありがとう(Thank God)」というプラカードを持ってデモをした団体である。彼らは、レキシントン町がマスコミの注目を浴びていることを知り、高校の卒業式で抗議活動をし、引き続き町にあるリベラルな教会とエスタブルック小学校の校門前で抗議運動を行うことを宣言した。

§§§

レキシントン町とレキシントン公立学校、レキシントン警察は、たった数ヶ月の間に、父兄の逮捕、複数の訴訟、高校での争い、白人優越主義者団体／ヘイトグループのデモ、マスコミからの取材攻撃、といった数多くの難問への対応を迫られたのである。



プロフィール

わたなべ　ゆかり・1960年兵庫県生まれ。京都大学医療技術短期大学部卒、同大学部専攻科修了。京都大学医学部付属病院に三年間勤務。その後ロンドン留学、日本語学校のコーディネーター、医療製品製造会社勤務などを経験。2001年、『ノーティアーズ』で第七回小説新潮長篇新人賞を受賞。2003年、二作目『神たちの誤算』を発表。現在はボストン郊外レキシントン市で夫と娘の三人暮らし。翻訳やエッセイ執筆の日々を送る。

＜著者のブログ＞
http://watanabeyukari.weblogs.jp/

註1　下記の「エスタブルック事件参考サイト・文献」、『たからまがじん』2007年10月・11月・12月号をご参照ください。
註2　バイブルベルト：アメリカ合衆国の中西部から南東部にかけて複数の州にまたがって広がる地域で、福音派プロテスタントが熱心に信仰され生活の一部となっている地域。（ウィキペディアより抜粋）

エスタブルック事件参考サイト

【LexingtonC.A.R.E.S.、レキシントン公立学校教育長、レキシントン検察長による共同声明】
http://www.lexingtoncares.org/LPSPressRelease2005-05-02.pdf
【LexingtonC.A.R.E.S. による記事】
HYPERLINK "http://www.lexingtoncares.org/LearnTheFacts.html"
http://www.lexingtoncares.org/LearnTheFacts.html
【Article 8 Alliance による記事】
HYPERLINK "http://www.article8.org/docs/news_events/parker/main.htm"
http://www.article8.org/docs/news_events/parker/main.htm

参考文献

Time : "Feels Like Teen Spirit", August 8, 2005.

Inside Jan.　Page 12　10/28/10, 11:15 AM　Adobe PageMaker 6.5J/PPC

バトルグリーン／連載エッセイ10

レキシントン町のユニークな対応<その1>

渡辺　由佳里

これまでのいきさつ
レキシントン町エスタブルック小学校で実際に起こった一連の事件について、四回にわたり紹介してきた。「同性の両親がいる家族」を紹介する本と、同テーマを扱った授業中のディスカッションについて、幼稚園児の父親ディヴィッド・パーカーが抗議し、学校からの立ち去りを拒否したため不法侵入罪で逮捕された。その後、同校二年生の担任が、二人の王子が結婚する絵本「King and King」を授業中に読んだ件で、パーカーは逆に町や公立学校を訴え、これらの事件は人気テレビ番組やインターネットで論争的になった。前号では、これらの事件をきっかけに、公立高校での対立、白人優越主義者団体／ヘイトグループのデモ、マスコミからの取材攻撃、といった数多くのドミノ効果が起こったことを紹介した。

もし日本で同じような事件が起こったとしたら、学校や町はどんな対応をするだろうか？

典型的な学校の対応は情報を公開せずに沈黙を守ることである。そしてマスコミの圧力に耐えられなくなった時点で校長が「私は何も知らなかった」と教師の個人的なミスをにおわせたうえで、「校長としての私の監督が行き届かなかった」と判で押したような謝罪をするのではないだろうか。保護者はマスコミと一緒になって攻撃することはあっても、学校や教師を守るために戦おうとはしない。スケープゴートにされ孤立した関係者が苦悩のあまり自殺することも少なくない。

＊＊＊

しかし、レキシントン町の人々の対応はまったく異なるものだった。

レキシントン公立学校の責任者と教育委員たちは、どれほど右よりのマスコミから叩かれ、何千ものヘイトメールを受け取っても、「エスタブルック小学校と教師の言動は、レキシントン公立学校の基本的価値観に即したものである」と毅然とした態度を貫いた。

そして保護者の一部は傍観者に徹さず、「私たちの公立学校を守ろう」と立ち上がった。

最初のアクションは、「生徒にとって心身共に安全な環境を守る」ことを短期目標に掲げた「Lexington C.A.R.E.S.」という町民グループの結成である。広報やマーケティングを専門にする者が中心になり、「状況を把握していないレキシントンの住民たちをゆがんだマスメディアの情報から守る対策」が立てられた。ここで強調されたのは、宗教保守派からの感情的な攻撃に対して「怒り」や「憎しみ」で応対するのではなく、「レキシントン町の基本的価値観のポジティブなメッセージ」に徹することである。

＊＊＊

町のレベルでも、「Emergency Response Committee（緊急事態対応委員会）」が速やかに招集された。この委員会は、以前にご紹介した「No Place For Hate（以降NPFHと省略）運営委員会」の委員長、警察、その他の公共機関の代表者など）で構成されており、町で緊急性の高い事件が発生すると二十四時間以内に集まって対応策を取ることになっている。

今回の緊急事態対応委員会のリーダーになったのは、NPFH運営委員長のジル・スマイロウと「Respecting Differences（相違を尊重する会）」の代表者メグ・ソーエンズである。実はこのソーエンズは、パーカーとその支持者たちがターゲットにしているエスタブルック小学校の「レズビアンの保護者」なのである。日本だけでなく合衆国でも、憎しみのターゲットになった人物は他人の目を恐れて身を隠すものだが、ソーエンズは町の基本的価値観を信頼し、町や学校と一緒に真っ向から偏見と闘うことを選んだのだ。彼女の勇気もさるものだが、彼女に対応委員会のリーダーの役割を与えた町のほうも、基本的価値観と一致した行動を取ったことを褒められるべきだろう。

＊＊＊

緊急対策委員会は、即座に町の主要組織の代表者と町民の希望者を招いて対応会議を行った。

会議の場には、五十人もの人々が集まった。NPFH運営委員、レキシントン警察の代表者、行政委員、レキシントンの宗教指導者協会の代表者と各教会の司祭、エスタブルック元校長と現校長、PTA会長、エスタブルック小学校反偏見委員会代表、教育委員、公立学校運営組織の代表者だけでなく、「何かをしなければならない」という義務感にかられた町民や卒業生もいた。

＊＊＊

私が予想していたのは、関係者がステージに立って質疑応答を交わすタイプの会議である。ところが、この緊急対策会議はのっけから私を驚かせた。

五十人が大きな円陣を作り、まず一人ずつ時計回りに自己紹介をするのである。しかも、互いの呼び名は役職にかかわらずファーストネームというルールだ。

少し遅れてやってきた私を隣の席に招いてくれたのは、グレーのスーツが似合う穏和な雰囲気の男性でダンキンドーナッツのコーヒーをすすっていた。

彼がコーヒーカップを持ち上げ、まじめな顔で「これでおわかりのように、私はレキシントン警察から来ました」と自己紹介すると、緊張感が漂っていた場にどっと笑いがわき起こった。アメリカでは警察官は仕事もせずにドーナッツとコーヒーでなまけてばかりいるというステレオタイプがあるからだ。

隣の人物が警察署長のクリストファー・ケイシーだと知って私はちょっと身構えたが、若い頃社会活動家だったらしき行政委員の一人が「警察官とファーストネームで呼び合う仲になるとは、あの頃の僕には想像もできなかったなあ」とジョークを言うと、ケイシーも一緒になって笑いだし、ゲイであることを公表している牧師が「私もです」と同意すると、笑いの輪はさらに広がった。自己紹介のおかげで話しやすい雰囲気ができあがり、それを受けてレキシントン警察は「我々は、情報を町民に速やかに公開するのがもっとも有効な対応策だと信じています」と単刀直入に現状を説明し始めた。　（つづく）

プロフィール

わたなべ　ゆかり・1960年兵庫県生まれ。京都大学医療技術短期大学部卒、同大学部専攻科修了。京都大学医学部付属病院に三年間勤務。その後ロンドン留学、日本語学校のコーディネーター、医療製品製造会社勤務などを経験。2001年、『ノーティアーズ』で第七回小説新潮長篇新人賞を受賞。2003年、二作目『神たちの誤算』を発表。現在はボストン郊外レキシントン市で夫と娘の三人暮らし。翻訳やエッセイ執筆の日々を送る。
<著者のブログ>
http://watanabeyukari.weblogs.jp/

※　下記の「エスタブルック事件参考サイト・文献」、『たからまがじん』2007年10～12月号、2008年1月号をご参照ください。
※　文中の固有名詞は新聞などですでに公表されており、ここでも実名を用いています。

エスタブルック事件参考サイト

【LexingtonC.A.R.E.S.、レキシントン公立学校教育長、レキシントン検察長による共同声明】
http://www.lexingtoncares.org/LPSPressRelease2005-05-02.pdf
【LexingtonC.A.R.E.S. による記事】
HYPERLINK "http://www.lexingtoncares.org/LearnTheFacts.html"
http://www.lexingtoncares.org/LearnTheFacts.html
【Article 8 Alliance による記事】
HYPERLINK "http://www.article8.org/docs/news_events/parker/main.htm"
http://www.article8.org/docs/news_events/parker/main.htm

参考文献

Time : "Feels Like Teen Spirit", August 8, 2005.

Inside Feb.　Page 2　10/28/10, 11:18 AM Adobe PageMaker 6.5J/PPC

バトルグリーン／連載エッセイ11

渡辺　由佳里

レキシントン町のユニークな対応〈その2〉

沈黙の抗議

これまでのいきさつ
レキシントン町エスタブルック小学校で起こった父兄の逮捕事件がきっかけで町に起こり始めた不愉快な出来事の数々に対応するために、レキシントンNo Place For Hate(NPFH)の委員長の呼びかけで緊急対策会議が招集された。第一回の対策会議に集まったのは、なんと五十人もの人々だった。（※註）

レキシントン警察署長のケイシーの紹介を受けて、まずジョー・オレアリー警部補が会議の皮切りとして出席者に現況を説明することになった。

レキシントン町で育ったオレアリーは、ヘイトクライムを担当する傍ら警察代表として Lexington No Place For Hate(以降NPFHと省略)の運営委員もつとめている。ポストンの警官らしくアイルランド人の血筋を引くオレアリーは、テレビ番組「Law & Order」で経験を積んだ警部役を演じられそうなルックスと声の持ち主で、レキシントン警察のスポークスマンとしても活躍している。けれども、彼の最大の長所はこのルックスではなく、徹底した「公平さ」である。ヘイトクライムや性犯罪の加害者に対して嫌悪感を表現しがちなNPFH運営委員の何人かは、これまでに何度かオレアリーに「罪を犯した者であっても、人権があるということを忘れてはならない」とおっとりとたしなめられている。

オレアリーは、輪になった五十人の出席者をざっと見渡すと、長年の知人に語りかけるように、警察が直面しているジレンマを打ち明けた。

＊＊＊

エスタブルック小学校での父親の逮捕事件の後、アーカンソー州の差別団体、「ホワイト・レボリューション（以降WRと省略）」がレキシントン町でのデモを計画したのは、最初は偶然のことであった。反ユダヤ主義の彼らは、アメリカ独立戦争の「革命」の地でありユダヤ人の多いレキシントン町が、「白人革命（ホワイト・レボリューション）」の宣伝にぴったりだと単純に思いついただけなのだ。

しかし、彼らはエスタブルック事件を知るやいなや、それが役立つことを直感的に悟り、インターネットで宣伝を始めた。差別団体としては知名度がさほど高くない彼らの主目的は、信念を主張することではなく、メディアの注目を浴びて新しいメンバーをリクルートすることなのである。だから、町民が怒って抗議デモをしたり、小競り合いでけが人が出てテレビのニュースになれば、これほどありがたいことはない。また、リベラルな町でのけ者になっている若者が共感を覚えてメンバーになってくれるかもしれない。

レキシントン警察は住民への完全情報公開を信じているので、通常であればここで話した内容を率直に住民全員に伝える。しかし、今回の場合は、興味津々でデモを見に行こうと思いつく者が必ずいる。また、反対のデモを行う必要を感じる者もいるだろう。それでは、WRの思うつぼである。警察は「無視」が最も有効な対策と考えているが、情報公開とのバランスという点で悩んでいる。

「そこで、皆さんのご意見を聞きたいのです」

オレアリーは、出席者への質問で説明をしめくくった。

＊＊＊

これからの展開がレキシントン町での臨時会議のユニークなところである。

なんせこの会議に集まった者の共通点といえば「レキシントン町」で働いているか暮らしている、ということだけである。職業だけでなく、価値観を大きく左右する年齢、人種、宗教、社会経済ステイタス、教育レベルはまちまちである。エスタブルック事件に直接関わっている者もいれば、新聞で読んだだけの者もいる。そんな五十人がてんで勝手に意見を述べ出したら収集がつかなくなるおそれがある。特に、話題がこのように深刻であればあるほど反論が個人攻撃の様相を帯びてくるのはよくあることだ。

だが、司会者役を務めているNPFH運営委員会委員長のジル・スマイロウは、いつもの明るい調子でまずNPFHの会議進行基本ルールを出席者に説明した。それは次のようなものである。

一、意見があるものはまず挙手し、司会者が指名した順に意見を述べる。

二、『あなたはこうだ』とか『警察はこうだ』といった他者を決めつける表現はしない。必ず『私は』でセンテンスを始める。

三、反対意見は建設的なものに限る。

四、他人を中傷しない。

スマイロウに励まされ、人々は気楽に手を挙げて意見を述べ始めた。会議が進むにつれ、他人から個人攻撃されるおそれがないことを悟ったシャイな人々も手を挙げるようになり、このような会では珍しく、最後まで和気藹々とした雰囲気が壊れることはなかった。

＊＊＊

「何もしないと、あとでデモを知った町民たちが『警察は何の対策も取らなかった』と不安や怒りを覚えると思う」という意見はあったものの、「無視が一番」という点では出席者の意見は即座に一致し、予想したよりも短時間で出席者全員が納得できる次のような案ができあがった。

一、警察とNPFHが最小限の情報公開と「彼らが来る日曜日には町の中心街に行くことを避ける。決して彼らの煽動に応じない。無視する」といった対応策の共同声明を作る。

二、ここに出席した希望者がそれをEメールで知人たちに送る。

三、同時にこの共同声明を地元の新聞に載せる。

五十人の出席者が知人に送ったEメールはそれらの知人からさらに多くの知人に広がり、新聞記事も併せて「デモを無視する」というメッセージは短期間に広くレキシントン町に行き渡った。そして、デモの日は、町の静けさにがっかりしたのか、WRはレキシントン町ではデモを行わなかったのである。

＊＊＊

しかし、この成功にほっとする暇もなく、WRよりも遙かに悪名高い「ウエストボロー・バプティスト教会(Westboro Baptist Church)」がレキシントン町に来るというニュースが入ってきた。

（つづく）

プロフィール

わたなべ　ゆかり・1960年兵庫県生まれ。京都大学医療技術短期大学部卒、同大学部専攻科修了。京都大学医学部付属病院に三年間勤務。その後ロンドン留学、日本語学校のコーディネーター、医療製品製造会社勤務などを経験。2001年、『ノーティアーズ』で第七回小説新潮長篇新人賞を受賞。2003年、二作目『神たちの誤算』を発表。現在はボストン郊外レキシントン市で夫と娘の三人暮らし。翻訳やエッセイ執筆の日々を送る。

<著者のブログ>
http://watanabeyukari.weblogs.jp/

※註　下記の「エスタブルック事件参考サイト・文献」、『たからまがじん』2007年10月～2008年2月号をご参照ください。
※　文中の固有名詞は新聞などですでに公表されており、ここでも実名を用いています。

エスタブルック事件参考サイト

【LexingtonC.A.R.E.S.、レキシントン公立学校教育長、レキシントン検察長による共同声明】
http://www.lexingtoncares.org/LPSPressRelease2005-05-02.pdf

【LexingtonC.A.R.E.S. による記事】
HYPERLINK "http://www.lexingtoncares.org/LearnTheFacts.html"
http://www.lexingtoncares.org/LearnTheFacts.html

【Article 8 Alliance による記事】
HYPERLINK "http://www.article8.org/docs/news_events/parker/main.htm"
http://www.article8.org/docs/news_events/parker/main.htm

参考文献

Time : "Feels Like Teen Spirit", August 8, 2005.

Inside Mar.　Page 2　10/28/10, 11:20 AM Adobe PageMaker 6.5J/PPC

バトルグリーン／連載エッセイ12

沈黙の抗議－後編－

レキシントン町のユニークな対応<その2>

渡辺 由佳里

応答を交わすシステムがすぐさまできあがった。

エスタブルック小学校の対策は校長と保護者ボランティア、警察が協力して立てたものである。幼い生徒たちに恐怖心を与えないよう小学校の登校時間を変更することや休校にすることも提案されたが、WBCがそれに応じてデモの時間を変えることは予想に難くない。それだけではなく、エスタブルック小学校の校長が強調したのは、授業を変更したり削ったりするのはヘイトグループの圧力に負けたことになるから通常と同じ授業をしたい、という希望だ。

そこで、警官を正門と裏門に配置したうえで、その朝のみ登校時にふだん閉じられている裏門を使うことが決まった。スクールバスだけでなく、自家用車も徒歩の生徒も裏門から入り、正門から入りたい者はなるべく保護者が同伴する。また、保護者がどうしても不安な場合は、その朝に限って遅刻と欠席を認める、というものである。これはヘイトグループの存在と意図を頭で理解することがまだできない幼い子供への心理的影響を考慮した配慮である。校長はあらかじめ保護者に手紙を書き、状況とヘイトグループの目的、そして彼らを徹底的に無視する対策を説明する。そして、教師には、生徒からの質問があれば簡潔に情報を教えるが、生徒が話題を出さないかぎりはいつもと同じ一日を送るよう指示を出すことになった。

☆☆☆

次は、高校とデモが予定されている各教会への対策だ。

レキシントン町の警察だけではなく、近隣の町の警察が治安のために協力をしてくれることになったが、ヘイトグループに対して何らかの意志を表明したい、という町民の気持ちは収まらない。

レキシントン町には多様な宗教団体の代表者が参加する聖職者連合というものがある。その連合が提案したのが、「静かなデモ」である。

「静かなデモ」では、参加者は手をつないで輪になり、抗議する相手に背を向けて立つ。彼らがどんなに酷い言葉を口にしようと決して言い返さず、ただ静かに立つだけのデモは「言うは易く行うは難し」である。なれない者は、つい言い返してしまい、それが争いに発展する可能性がある。成功させるためにはトレーニングが必須である。そのトレーニングを引き受けてくれたのは、会議の出席者の一人だ。デモが行われる学校や教会に無関係の人が挙手して「実は、私はその専門家です」と無報酬のトレーニングを気軽に申し出たのは、決して珍しい場面ではなかった。「これをやってくれる人は?」と問いかけがあると、必ず「それは私が引き受けましょう」と誰かが手を挙げる。それがこの会議のスタイルなのである。

☆☆☆

「どうせデモをするのならば、我々の町のディバーシティと協調を強調しましょう」、ということで、ユダヤ教教会、ユニタリアン教会、コングリゲーショナル教会、バプティスト教会などが混じり合って手をつなぐ、「静かなデモ」を行うことが決まった。しかし、町に存在する宗教団体のうち最も信者が多いグレースチャペルは参加を辞退した。代表者は何の説明もしなかったが、教義で同性愛を罪悪とみなしている彼らにとって、このデモは根本的に支持できないものだったのかもしれない。

☆☆☆

私は「当事者以外はデモの場に行かないように」という警察の要請に従って高校と教会には行かなかったが、月曜の朝はふだんのジョギングのついでにエスタブルック小学校の正門を遠くから観察できる道を通った。

小雨がふるエスタブルック小学校正門の前には、「神はアメリカを憎んでいる(God Hate America)」というWBCのカラフルなプラカードが並んでいた。彼らを囲んでいるのは、テレビニュースでよく見るレポーター数人と警察官だけで、観客が欠落しているために滑稽なほど静かな光景だった。

夕方のテレビのニュースでは、WBCがレキシントン町の次に訪れた他の町での住民の抗議デモや保護者とWBCメンバーとの間の罵り合いの場面が繰り返し流れていたが、エスタブルック小学校についてはWBCのメンバーが映っただけだった。ここでは何もニュースとして伝える事件が起こらなかったからだ。

翌週のボストングローブ紙に掲載されたのは、レキシントン町のユニークな調和を表現する美しい写真だった。メソジスト教会を背景に、ユダヤ教、ユニタリアン、コングリゲーショナルの信者たちが手をつなぎ、WBCの醜いデモに背を向けて立っている。その静けさが伝えるメッセージは、言葉よりも強いものだった。

☆☆☆

連続した事件への、警察、教育長、教育委員会、公立学校運営陣、教師、保護者、聖職者連合、町民ボランティアの対応は、まるで毛利元就の「三本の矢」ならぬ「無数の矢」の教訓のようだった。校長だけの判断だったら、エスタブルック小学校のデモを静かに回避することはできなかっただろう。警察だけでも無理だ。それには保護者のインプットと協力が必要だ。我々はパートナーであって、敵ではない。レキシントン町に住む異国人の私にとって、この信頼の輪に含まれるのは何よりも誇らしいものであった。

☆☆☆

キャリー・ホールで二ヶ月にわたり連続で開かれた臨時会議は、WBCが去った翌週の六月七日に最終日を迎えた。そのしめくくりとして私たちは席から立ち、左右に立っている者と手を繋いでひとつの輪を作った。ユダヤ教のラビ、ゲイの牧師、バプティスト教会の牧師、教育委員、小学校と高校の校長、社会活動家、警察官、ジョン・ケリー支持者とブッシュ大統領に票を投じた者……。宗教、政治、思想の異なる人々が手を取り合い、「これからもレキシントン町に難問が発生すれば、こうして力を合わせて立ち向かいましょう」と誓い、拍手をして分かれた。

（つづく）

※註　下記の「エスタブルック事件参考サイト・文献」、『たからまがじん』2007年10月号～2008年3月号をご参照ください。
※　文中の固有名詞は新聞などですでに公表されており、ここでも実名を用いています。

エスタブルック事件参考サイト

【LexingtonC.A.R.E.S.、レキシントン公立学校教育長、レキシントン検察長による共同声明】
http://www.lexingtoncares.org/LPSPressRelease2005-05-02.pdf

【LexingtonC.A.R.E.S. による記事】
HYPERLINK "http://www.lexingtoncares.org/LearnTheFacts.html"
http://www.lexingtoncares.org/LearnTheFacts.html

【Article 8 Alliance による記事】
HYPERLINK "http://www.article8.org/docs/news_events/parker/main.htm"
http://www.article8.org/docs/news_events/parker/main.htm

参考文献

Time : "Feels Like Teen Spirit", August 8, 2005.

Inside Apr. Page 12 10/28/10, 11:24 AM Adobe PageMaker 6.5J/PPC

バトルグリーン／連載エッセイ13

変わりゆくコミュニティ

渡辺 由佳里

私は町の行政委員の依頼で、町の将来のために調査と提案を行う小委員会の委員をいくつか引き受けたことがある。それらは、「町に存在する対立の種類の原因を特定する」小委員会、「住民の建設的な対話の方法を提案する」小委員会、そして去年から今年にかけての「町の人口動態の特徴とそれにまつわる問題点を特定する」小委員会である。

最初のふたつの委員会で学んだことの一部は二〇〇七年六月号掲載の同連載『憎しみ』のない町の舞台裏〜後編〜」で簡単にご紹介したが、ボストン周辺のコミュニティが抱える多様な問題をおわかりいただくために、もういちど詳しく町の歴史をご紹介したい。

＊＊＊

レキシントン町は、「建国の英雄」の子孫にアイルランド系やイタリア系の移民が加わったものの、長期にわたって人よりも牛の数のほうが多いような農業中心の小さな町だった。そののんびりした町に変化をもたらしたのは、第二次世界大戦後の経済ブームである。町は急速にボストン市のベッドタウン化して工業と商業が盛んになり、農家はそれにしたがって減少の傾向をたどった。だが、もっと劇的に町の様相を変えたのは、自然が残る環境を求めて五〇年代から六〇年代にかけてケンブリッジ市界隈から移住してきたハーバード大学やマサチューセッツ工科大学の職員たちであった。町には、言語学者で思想家のノーム・チョムスキー、ノーベル平和賞のヘンリー・エイブラハム、知的巨人と呼ばれるエドワード・オズボーン・ウィルソンなどに代表される知識人たちが増え、戦争直後には民主党員が四人しかいなかった保守的な町は急速にリベラルに傾いていった。

＊＊＊

新しい住民たちは、レキシントン町の公教育に大きな影響を与えた。大学で教える彼らは、自分の子供にとって理想の学校教育を実現することに情熱を抱き、学校と協力していろいろな改革を試みた。

六〇年代の米国東部は革新的なアイディアに満ちていて、「何ができるか、まずやってみようじゃないか」という時代だった。国や州だけでなく、町の公立学校にも標準カリキュラムなどというものはなく、それぞれの学校が勝手にカリキュラムを作っていたというのだから驚く。

「子どもたちに自由やゆとりを与えたほうがすばらしい能力が生まれる」という考え方がもてはやされたのもこのころである。

現在町に六つある小学校のひとつ、エスタブルック小学校は、ハーバード大学とレキシントン公立学校の提携で「チーム教育」という新コンセプトを実現するために、一九六一年に設立されたユニークな学校だ。学校の建物も能力別クラスと講義を行いやすいようにデザインされたのだが、小学校での講義や能力別クラスの問題点が明らかになり、試行錯誤を重ねたもののチーム教育は自然消滅の運命をたどった。しかし、教育熱心な保護者に支えられたエスタブルック小学校の学力が突出したために、レキシントン公立学校は残りの五校を同じレベルに引き上げるように努力するようになった。

＊＊＊

このような公立学校の努力が噂になり、「良い教育」を求めて教育熱心な親たちがレキシントン町に移住してくるようになった。

そのころ、他の町からレキシントンに越してきた隣人たちにこの町を選んだ理由を尋ねると、必ず「公立学校がよいから」という答えが戻ってくる。ただし、その「よい公立学校」の定義は、最近越してきた親たちのように「MCASのランキングが高い」とか「数学チームが強い」といったものとは異なる。五〇年代、六〇年代の親たちにとっては、子供に考える能力を身につけさせる理科と社会科の授業であり、豊かな音楽や美術のプログラムであり、早期からの外国語教育であった。

そのような「よい教育」に惹かれて、第二次大戦後には皆無だったユダヤ系の住民が急増し、引き続いてアジア系移民が増え始めた。

＊＊＊

最近の「町の人口動態の特徴とそれにまつわる問題点を特定する」小委員会でわれわれが驚いたのは、このアジア系住民の増加があまりにも劇的に進んでいることだった。

私と同い年でエスタブルック小学校に通っていた隣人に尋ねると、そのころアジア系の生徒はほとんどいなかったと答えた。マサチューセッツ州の公式記録(http://www.doe.mass.edu/)によると、私の娘が幼稚園に入学した一九九八年度のアジア系の生徒は全体の14.2%だった。当時ですら「なんてアジア人が多いのだろう」と感じたものだが、今年(二〇〇七-〇八)の数字には目を疑った。なんと30%アジア系の生徒がその二倍以上になっていたのである。私の娘のようにふたつ以上の人種で登録している生徒も加えると、ぱっと見た目にはアジア人が半分近くに見える。高校のオーケストラでは白人はまれな存在だ。

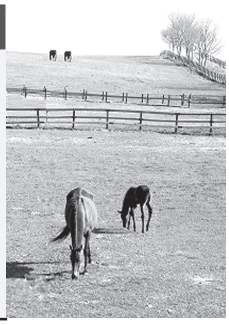
増えたのはアジア人だけではない。中東、ヨーロッパからの移住者や海外赴任の「外国人」も増え、英語が母国語ではない生徒は二割近くで、英語力に限界がある生徒は4%ほどである。

＊＊＊

二世代以上前からこの町に住み続けた旧住民たちは、自分たちが少数派（マイノリティ）になってしまったこのような状況をどのように受け止めているのだろうか？

それがすべて好ましいものではないことは、容易に想像がつくだろう。

（つづく）



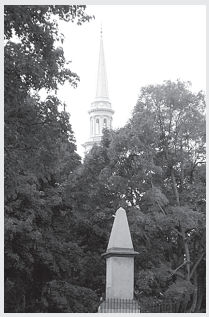
★プロフィール★
わたなべ　ゆかり・1960年兵庫県生まれ。京都大学医療技術短期大学部卒、同大学部専攻科修了。京都大学医学部付属病院に三年間勤務。その後ロンドン留学、日本語学校のコーディネーター、医療製品製造会社勤務などを経験。2001年『ノーティアーズ』で第七回小説新潮長篇新人賞を受賞。2003年二作目『神たちの誤算』を発表。現在はボストン郊外レキシントン市で夫と娘の三人暮らし。翻訳やエッセイ執筆の日々を送る。
<著者のブログ>
http://watanabeyukari.weblogs.jp/

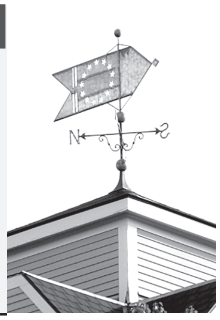
Inside May　Page 13　10/28/10, 9:40 PM　Adobe PageMaker 6.5J/PPC

バトルグリーン／連載エッセイ14

コミュニティ意識の解離

渡辺 由佳里





たいていの国の地方のコミュニティでは、住民の移り変わりが少ない。それゆえ「自分たちは誰なのか?」というアイデンティティがはっきりしていて、住民の常識や価値観が定着している。それが良いことか悪いことかは別として、こういうコミュニティのほうが住民をまとめやすいし、住民にとっても特に自分の立場を説明する必要がないコミュニティは気楽である。

『たからまがじん』の読者に共通するのは、そんな気楽な環境を離れ、自分の「常識」が通用しないコミュニティによそ者として加わった経験であろう。

年齢や立場によって非常に異なるだろうが、多くの人は「郷に入れば郷に従え」ということわざにならい、なるべくその国の習慣に合わせて行動しようと試みたのではないだろうか。よそ者が新しい社会の一部になるために努力するのは、私が育った日本の常識のひとつである。

＊＊＊

しかし、日本人をよく知る欧米人たちは、「個人として付き合う日本人はとても礼儀正しくて親切で時間厳守なのに、集団としての日本人は無礼で自己中心的で時間を守らない」と不思議がる。昔のギャグに「赤信号みんなで渡れば怖くない」というのがあったが、日本人の集団心理は「郷に入れば郷に従え」の知恵を打ち消す傾向があるようだ。

＊＊＊

先月号で触れたように、アジアからの移民が急増しているレキシントン町の状況は、日本人観光客の集団心理に近いかもしれない。まだ移民がほとんどいなかったころレキシントン町に移住したアジア系移民たちは、古くからの住民に受け入れてもらうために誰よりも町に貢献しようとした。しかし、移民の数が膨らみ、町のコミュニティの中で個々のエスニックグループの常識や価値観を共有できる独自のコミュニティを作り上げられる今、移民たちは郷に従わなくても孤立することはなく、気楽に生きてゆける。

＊＊＊

「古い住民の価値観を理解する必要も尊重する必要もない」という新しい住民の態度は、当然のことながら古い住民の神経を逆なでする。たとえそれが無意識や無知によるものであってもだ。

かくいう私もレキシントン町に越してきてしばらくの間は、町のしくみを知る必要も、この町特有の価値観を学ぶ必要も感じなかった。父親が県の職員で母親が小学校の教師だった私は、給料をもらっている専門職の彼らに任せておく日本の常識に従って暮らしていたのである。

＊＊＊

数年経って私がようやく知ったのは、アメリカ合衆国の地方自治体の運営方法はそれぞれの自治体によって異なるということだ。同じマサチューセッツ州でも、町長がいる町といない町がある。レキシントン町では町長ではなく、直接選挙で選ばれた五人の行政委員(Selectman)、九つの地区から選出された百八十九人の町議会議員(Town Meeting Members)、タウンマネジャーの三つの部門が町を運営している。町の方針を決めるのが行政委員会、予算や条例を決めるのが町議会、そして、行政委員会の監督のもとに直接町政を運営するのがタウンマネジャーである。

もっと驚くのは、町で最も権力がある行政委員と、町の財布を握る町議会議員が全員無給のボランティアだということだ。町民の選挙で選ばれていないタウンマネジャーだけが年収約十万ドルの専門職で、この町の住民でなくてもよい。

公立学校の運営も、町の行政と同様である。町議会が可決した予算の詳細と学校の方針を決めるのは選挙で選ばれた五人の教育委員(School Committee Members)で、小学校から高校までの公立学校の具体的な運営の責任者が教育長(Superintendent)という仕組みだ。教育委員達は町民のボランティアで、教育長は有給の専門職である。

町や学校で問題が発生すると、行政委員や教育委員の自宅の電話はひっきりなしに鳴り、嫌がらせのEメールが殺到し、町の新聞では名指しで攻撃される。予算の時期には家族との団欒は皆無になり、睡眠不足になる。こんなに気苦労の多い仕事を、彼らは無報酬で引き受けているのだ。

＊＊＊

ところが、恩恵を受けている私たちのほとんどはそんなことを知ろうともしない。

あるとき香港出身の知人が、物知り顔で私にこうささやいた。「教育委員は偉そうにしているけれど、小遣いをもうけたいからなるだけ」

そこで私は彼らが無報酬のボランティアであることを伝えた。

彼女は「それ、本当?」と驚いたものの、すぐに立ち直って自信に満ちた態度で反論した。

「でも、選挙運動の寄付で余った分は自分のものにするのよ。そう聞いたことがある」

彼女の「無報酬とはいえ、きっとどこかに見返りがあるはず」という信念は、どんなに私が試みても揺るぐことはなかった。

ボランティアが町を運営するという観念は、それがない国で生まれ育った者には理解しがたいものである。だが、ここで問題なのは、彼女の「理解したい」という欲求の欠如である。

かつてレキシントン町の新住民と旧住民との間に存在した、「わかってもらいたい」、「わかりたい」という欲求は、必要がなくなってきたので、急速に消えつつある。この欲求が消えると、住民同士の解離はどんどん広がり、コミュニティ意識とひいては郷土に対する愛情が薄まる。

これは、レキシントン町が直面している問題のひとつである。

★プロフィール★
わたなべ　ゆかり・1960年兵庫県生まれ。京都大学医療技術短期大学部卒、同大学部専攻科修了。京都大学医学部付属病院に三年間勤務。その後ロンドン留学、日本語学校のコーディネーター、医療製品製造会社勤務などを経験。2001年『ノーティアーズ』で第七回小説新潮長篇新人賞を受賞。2003年二作目『神たちの誤算』を発表。現在はボストン郊外レキシントン市で夫と娘の三人暮らし。翻訳やエッセイ執筆の日々を送る。
＜著者のブログ＞
http://watanabeyukari.weblogs.jp/

Inside June Page 12 10/28/10, 9:44 PM Adobe PageMaker 6.5J/PPC

バトルグリーン／連載エッセイ15

コミュニティをつなぎとめる人たち

渡辺 由佳里

先月号で移民の急増によるレキシントン町のコミュニティ意識の解離について触れたが、幸いなことに町の中心人物たちは現時点ではさほど悲観的にはとらえていないようである。

＊＊＊

町議会議員(Town Meeting Member)のレイシーにボランティア人口の減少について尋ねたところ、「レキシントン町は他の町よりもまし」とまったく気にしていない。この町にはいくつもの委員会の委員をこなしている彼のような〈ボランティア常連〉が二〜三千人いて「人口約三万人の町でこの割合は多い」のだそうだ。「この町には自分の信念を押しつけたい者が多いから、少なくとも町議会議員については、これからも立候補者にはことかかないだろう」と彼は笑う。

移民が旧住民の常識を尊重しないことについても、ボランティア常連の多くは、移民をひとくくりにして問題視する旧住民のほうにも非があると考えている。彼らは、「何世代も前からこの地に住んでいるから自動的に新住民よりも発言権がある」という発想そのものが間違っていると考える。出身地やこの地に住む長さにかかわらず、町民全員に同等の権利がある。それは「町のアイデンティティ」についても同様だ。住民が「町の理念」を作り、それに惹かれて集まった者がアイデンティティを築き上げ、維持する。それがレキシントン流の民主主義だと彼らは信じている。

教育委員(School Committee Members)の顔ぶれを見れば、彼らの信念を支持する住民が多いのもあきらかである。私の隣人のサクージャはインド出身で、委員会の長の務めるのは、父親がキューバからの移民で、保守的なインディアナ州で生まれ育ったヒスパニック系のディアスである。

＊＊＊

私は、ディアスが教育委員に就任したばかりのころ、その動機について尋ねたことがある。

教育委員は、公立学校で問題が発生したら町民からの非難が集中する心労の多い立場だ。それなのに選挙費用を自己負担してまで町に奉仕する理由は何なのだろう。

ディアスは、謙遜や婉曲的な表現はまったく試みず、率直にこう答えた。

「教育委員は、人々から尊敬される、政治的な地位です。この仕事についているのは、たいてい政治に興味を抱いている者なのですよ。嫌な思いをすることはあまりありません。報われる仕事です」

彼は、「ほかの州に住んだことがない人にはわかりにくいかもしれませんが……」と前置きして、マサチューセッツ州の特別さを説明してくれた。

アメリカ合衆国の他の州の地方自治体では、住民は愚痴は言っても直接政治に関わろうとはせず、政府任せにしている。それに比べ、マサチューセッツ州の住民は、歴史的背景のせいか、行政のプロセスに自分たちが参加するのは当然の権利だと信じている。ことにレキシントン町の住民はその意志が強いため、自分たちが直接選べる無給の代表(つまり五人の行政委員と五人の教育委員)にプロの公務員(タウンマネジャーと教育長)よりも強い権力を与えているのである。

また、アメリカの地方自治体にとってもっとも重要な公共施設は公立学校である。

「アメリカのどの地を訪れても、必ず同じ答えが戻ってきます。たとえ公立学校にどんなに不満を覚えていても、この答えは変わりません」

地方自治体にとってそれほど重要な公立学校の方針を決める地位が、教育委員なのである。イギリスという権力に反抗して立ち上がった祖先を誇るレキシントン町の住民がディアスに与えた信頼の大きさは、ビジネスで成功して早期に引退した彼にとって、それと同等かそれ以上に輝かしい人生での達成なのだ。

＊＊＊

ディアスは、アメリカの公立学校に対する私の見方を根本的に変えるこんな話をしてくれた。

「アメリカの公立学校というのは『手に職をつける(vocational)』ためではなく、民主主義を遂行できる市民を育てるために作られたということを知っていますか?」

ディアスが崇拝するサム(サミュエル)・アダムスは、日本人にはラガービールとして知られているだけだが、英国の植民地課税政策に反対して「ボストン茶会事件」を首謀し、のちにマサチューセッツ州知事になった建国の英雄である。アダムスが、「公教育(公立学校での教育)」をすべての市民に与えたいと願い、マサチューセッツ州の憲法にもそれを記した理由は、市民が民主主義を遂行するためには教育が不可欠だと信じたからである。

知識がなければ、自由や民主主義を理解することすらできない。「知識が普及し、徳が順守されれば、誰も従順に自由を引き渡したり、簡単に抑制されたりはしないだろう」とアダムスは論じた。

ニューイングランド地方、特にマサチューセッツ州が残りのアメリカと異なるのは、現在でもアダムスの理想を維持し、「民主主義のプロセス」を重視することだとディアスは考えている。だからこそ彼は、公立学校の義務は、読み書きのみならず「民主主義のプロセス」を子供たちに教えることだと信じている。

このような教育委員たちに導かれているからこそ、レキシントン公立学校は小学校から政治について学ぶ機会を多く与える。たとえば、大統領選挙のときには小学校から高校まで年齢に応じたレベルで情報収集と生徒間ディベート、模擬選挙などが行われる。それは、アダムスが論じたように、公教育でもっとも大切な民主主義のプロセスを教えるためであり、子供たちに社会に貢献するための技能を身につけさせるためでもあるのだ。

私はレキシントン公立学校の教育理念を反映する素敵な高校生たちに出会った。

★プロフィール★
わたなべ　ゆかり・1960年兵庫県生まれ。京都大学医療技術短期大学部卒、同大学部専攻科修了。京都大学医学部付属病院に三年間勤務。その後ロンドン留学、日本語学校のコーディネーター、医療製品製造会社勤務などを経験。2001年『ノーティアーズ』で第七回小説新潮長篇新人賞を受賞。2003年二作目『神たちの誤算』を発表。現在はボストン郊外レキシントン市で夫と娘の三人暮らし。翻訳やエッセイ執筆の日々を送る。
<著者のブログ>
http://watanabeyukari.weblogs.jp/

Inside7/8 Page 12 11/1/10, 11:32 AM Adobe PageMaker 6.5J/PPC

バトルグリーン／連載エッセイ16

教育の恩恵

渡辺 由佳里

私自身の人生を振り返っても言えることだが、青年期の若者の社会観は主観的で自己中心的になりがちだ。生理的・心理的に発達中で社会的に成熟しきっていないから当然といえるのだが、典型的な青年は、自分の欲するものを得るためであれば他者にかける迷惑は考慮しない。それが、「理想的社会をつくる」という高尚な目標であってもだ。満足させたいのは他者ではなく自己である。

私が学生時代に学生運動家が苦手だったのは、他者の幸運を願うために援助したいという欲求よりも、自己の価値を証明するために体制を破壊するという利己的な欲求を感じたからである。

レキシントン町の高齢者が「町の中心街で高校生がたむろしていると、行きにくい」と感じるのは、若者の利己的で破壊的なエネルギーが怖いからである。私もたまに訪れる東京でそれをひしひしと感じるが、この町の高校生を怖いと感じることはほとんどない。それは、数年前に取材目的で多くの高校生たちと会話を交わす機会に恵まれたからだろう。

＊＊＊

私が出会った高校生には、成績表にはA+しかない秀才や、音楽の天才、優れたアスリートといったエリートもいたが、自称「ふつうの生徒」のほうが多かった。うれしい驚きは、自称「ふつうの生徒」の会話の面白さであった。親、教師、同級生といった周囲の人々や高校の社会心理的分析は興味深く、地球の温暖化、富の集中といった政治的な話題はなかなか深い。

彼らと語っているうちに、私は「マルチプル・インテリジェンス理論」のことを思い出した。ハーバード大学のハワード・ガードナー教授が提唱したもので、人間の知能には一般的に受け入れられている言語的知能(Linguistic intelligence)と論理数学的知能(Logical-mathematical intelligence)のほかにも空間的(Spatial)、音楽的(Musical)、体感運動的(Bodily-Kinesthetic)、内面的(Intrapersonal)、対人的(Interpersonal)、という七つの知能があるという説である。

学校教育では一般的に言語的知能と論理数学的知能に秀でている生徒の評価が高く、日本で有名大学に合格するのはこのカテゴリーに属する子供たちである。音楽的知能や体感運動的知能もすでに評価されてきた。

私が出会ったレキシントン高校生の多くはこれらの能力にも秀でていたが、それよりも印象的だったのは、他人の気持ちを察したり、人をまとめたり、指導することができる対人的知能や自分自身を理解できる内面的知能のほうである。

＊＊＊

彼らには体制への不信感はあっても破壊の情熱はない。身近な大人への理解もある（驚くことに、私が出会った高校生の　%が「親に感謝している」、「親が好き」と答えている）。町の高齢者を思いやり、社会情勢を憂い、自分にできることは何だろう、と自問する。また、町や学校といった体制をまっこうから否定せず、協力して状況を改善しようとする。そして、まだこれだけしか生きていないというのに、本から得た理念だけでなく自分の体験と比較することができる。

＊＊＊

四年前、大学生活を一年経験したライアン・パッチは、ライフガードとしてアルバイト中のプールで、エリート校として知られるレキシントン高校の「誰も語らないダークサイド」について率直に語ってくれた。

レキシントン高校の競争の激しさは、全体的な学力レベルを上げているけれども、同時に多くの学生の自己評価の低さを招いてもいる。数学や科学のコンテストで優勝したり、大学で数学の授業を受けたりする生徒が山ほどいるレキシントン高校では、アメリカの平均的な高校でスターになれる優等生でも平凡な学生になってしまう。当然彼らには敗北感や劣等感がつきまとう。

また、「成績さえ良ければ、何でも許す」という親たちの態度も彼は批判した。だから「親に隠れてセックス、ドラッグ、アルコールに溺れる二重生活を送る者がいる」というのだ。

ライアンは、ふつうの人よりも感受性が強いのだろう。だから教育の目的が「人間的な成長」を促すことではなく有名大学入学を目的としたものになっていると感じてすっかり嫌気がさし、有名大学に入るための努力はまったくしなかった。

しかし、彼はウィートン大学に入学してから自分が受けた教育を振り返り、その恩恵に気づいた。そのひとつは、レキシントン高校の校風ともいえる社会貢献の意識である。

ライアンはプールに目をやってこうつぶやいた。

「僕はレキシントン町という世界でもっとも恵まれた環境で育ち、プールサイドに座っているだけで一時間に　ドルももらえる。世界の多くの人々にしてみればとても不公平なことなんだ」

大学の授業で「貧困が個人に与える影響」について興味を抱いた彼は、在学中にプロジェクトを企画して大学から資金を得、ニカラグアに渡った。そして、貧しい村でふたつの地域銀行を設立し、人の個人にローンを与えて彼らが新しいビジネスを始めるのを助けた。そして、彼は今年の夏アメリカ横断の旅で彼が力を注ぐマイクロクレジット（＊註参照）の啓蒙と募金運動を行っている。

次に彼が気づいた恩恵は大学で苦労せずによい成績を取ることができることである。無意識のうちに高校で勉強の仕方を身につけていたようなのだ。今年大学を卒業した彼は、まだ行くかどうか決めていないがイギリスのケンブリッジ大学の大学院に合格している。

「大金をチャリティに寄付して満足するような金持ちじゃなくて、自分の手で恵まれない子どもたちの生活を変えたい」という四年前の彼の夢は、ただの夢では終わらないだろう。

＊註　マイクロクレジット
開発途上国で生まれた画期的な小額の融資システム。きわめて貧窮な者（多くは女性）に資金を与えて個人事業を始めさせ、自らの力で貧困から抜け出す機会を与えて成功を収めている。
ライアン・パッチが今年協力して資金を集めているのは、ニカラグアのFoundation for International Community Assistance (FINCA)。ライアンのキャンペーンの情報は次のサイトまで。http://pedaliforpeace2008.org/

★プロフィール★
わたなべ　ゆかり・1960年兵庫県生まれ。京都大学医療技術短期大学部卒、同大学部専攻科修了。京都大学医学部付属病院に三年間勤務。その後ロンドン留学、日本語学校のコーディネーター、医療製品製造会社勤務などを経験。2001年『ノーティアーズ』で第七回小説新潮長篇新人賞を受賞。2003年二作目『神たちの誤算』を発表。現在はボストン郊外レキシントン市で夫と娘の三人暮らし。翻訳やエッセイ執筆の日々を送る。
<著者のブログ>
http://watanabeyukari.weblogs.jp/

Inside Sep.　Page 11　10/30/10, 2:49 PM　Adobe PageMaker 6.5J/PPC

バトルグリーン／連載エッセイ17

良い公立学校とは？

渡辺 由佳里

自分の子供が良い教育を得るために住む町を選ぶとしたら、何を参考にすれば良いのだろう？レキシントン町に近年越してきた親の何人かに尋ねたところ、全国的に有名な数学チームや充実した音楽プログラムだと具体的に答えた者も何人かいた。中には、学校の校長や高校の数学ディレクターと面会し、「Gifted Child（天賦の才がある子供）」に対する配慮があることを確認してから決めたという行動派もいたが、たいていは不動産業者からの情報に頼るのではないだろうか。

不動産業者が与えてくれる資料には、公立学校が生徒一人頭に費やす教育費、マサチューセッツ標準テスト（MCAS）やSATの結果が含まれている。私たち家族がレキシントン町を選んだ十三年前には教育費が高いほど町が教育熱心なのでよい学校だという解釈だった。

『Boston Magazine』が毎年組んでいる「Best Public Schools」の特集号を参考資料にする人もいる。だが、今年の九月号の「Smartest Public School」は、ちょっと志向を変えて、生徒一人頭の教育費とMCASスコアの改善率を重視している。つまり、コストをかけずに点数が上がっている公立学校が「賢い（Smart）」というアイディアだ。教育費を切り詰めている学校のほうが良いというのは、私が十三年前に参考にした資料とはほぼ逆の考え方である。

＊＊＊

雑誌は売るために新たなテクニックでランキングを試みるのであろうが、この選択基準では、毎年スコアが高いために改善する余地がほとんどなく、しかも一人頭の教育費がやや高いレキシントン高校は、SATスコアの平均点が（入学試験などの選考過程がある高校を除いて）州で最高位だったにもかかわらず、「Smartest Public School」では、アカデミックでは五位にランクされている（雑誌では編集ミスでリストから漏れている、＊註参照）。

何よりも、良い学校をランキングしようとすることが無意味だ。

まず、SATスコアだが、試験の点を重視する親が集まる町の学校の点数が高いのは学校のせいではない。また、教育費にしても、多くの公立学校を圧迫するのは特別教育の費用である。法により、その町の公立学校が生徒の特別教育のニーズに応えられない場合には、公立学校はその生徒が学区外の公立学校あるいは私立学校に通う費用をまかなわねばならない。校区外に行く生徒が一人増えるだけでも特別教育費は急増する。それだけでなく、ガソリン代の高騰による光熱費やスクールバスの運営費などが教育費全体を圧迫しており、教育の改善どころか、これまでと同じレベルの教育を維持するための費用を捻出することもできなくなっている。資金をかけていない学校は「賢い」というよりも、プログラムや職員を削っているだけのことなのだ。

＊＊＊

これまでの号で説明したことだが、この国では地方自治体の固定資産税が（マグネットスクール（＊註1）を除く）公立学校の費用の大部分をまかなっている。そればかりか、教育費が地方自治体の予算全体に占める割合はほぼ半分なのである（レキシントン町の場合、私が越して来た十三年前は約六十％で現在は約五十％）。この国に数年しか住んでいない人に知っていただきたいのは、貸し家やアパートに住んでいる駐在員の子供たちの教育費を払っているのは、学校に通う子供がいない多くの（持ち家がある）町民だという事実である。引退して年収がほとんどなくなった彼らが、教育費の予算を捻出するために毎年急上昇する固定資産税（＊註2）を払い続けるのを拒む気持ちを少しはわかっていただけるかと思う。

税のオーバーライド（＊註3）で費用をまかなうことを住民が拒否する場合、教育のどこかを削るしかない。それが、教育委員の直面する難問である。

＊＊＊

私が会った教育委員たちは口をそろえて、「公立学校はすべての子供のために存在しなければならない」と言うが、その難しさを一番良く知っているのも彼らである。彼らがよく聞く苦情に、「公立学校は、できる子と特別教育の子ばかりにリソースを使い、普通の子をないがしろにする」というものがある。成績が優秀な生徒は学校が与える教育の機会を最大限に活用する傾向があるし、レキシントン公立学校の場合、特別教育の生徒は全体の一六％だが特別教育費は教育費全体の一三％（＊註4）に達する。そして、特別教育や数学・科学のようなコアのプログラムを削るわけにはゆかないので、「普通の子」が最も活用できるスポーツ、音楽、芸術などのプログラムが危機にさらされる。実際に多くの町の公立学校がスポーツ、音楽、芸術プログラムを縮小または削減している。このような形で教育費を節約し、MCASというテストの点が前年よりもやや上昇したからといってその学校が「賢い（Smart）」と評価する前述の『Boston Magazine』の特集号は、読者に誤解を与えるばかりか、良い学校を守ろうとして戦っている教育委員や教育長に対する侮辱だと私は思うのである。レキシントン町の教育長は、レキシントン公立学校での特別教育を充実させることで校区外に送る生徒の数を減らして出費を抑える、という画期的な方法を実現したが、この雑誌はそこまで深く追求してはいない。

＊＊＊

「学校は学問さえ教えればよい」そう断言するアジア系の母親に会ったことがある。

良い大学に進学させてくれるのが良い高校だという考え方である。「公立学校は読み書きだけ教えればよい。オーケストラをさせたければ私立に通わせろ」という子供がいない年配の白人女性からの訴えも聞いたことがある。

だが、レキシントン町の教育委員たちは学業面での達成が公立学校の唯一の目標だとは思っていない。公教育のさらに重要な目的は、「子供たちが自分自身のユニークな潜在能力を見出し、民主主義や国民の権利と義務を理解し、人間的な成長を遂げるのを援助すること」だと信じている。テストの点を取るためだけの教育では、ひずんだ育ちかたをしてしまう。そうではなく、スポーツや芸術、人権教育やディバーシティプログラムを通じて、学校は生徒に全人的に成長する機会を与えるのである。そのような環境を作るためには、教師を特別に指導する必要があり、そのためには、教育委員、教育長、校長たちがひとつの理想のもとに一丸になる必要がある。良い教育の環境は、偶然に発生するものではない。

＊＊＊

さて、このような環境で育った子供たちは、学校に対してどんな感想を抱いているのだろう？　来月号では、生徒の視点を紹介しよう。

註釈＊）『ボストンマガジン』The best public school のランキングは http://www.bostonmagazine/com/best_high_school_chart/index.html をご参照ください。

＊1）マグネットスクール：ある分野で優れた才能を持つ子どもを広域から集める公立学校で、入試や書類専攻があり、多くは大学、州、企業との連携で運営され、あらゆる場から助成金を受けている。

＊2）固定資産税は、持ち家の評価額に応じて課せられる。レキシントン町の場合、2000年の調査では平均5,680ドルであったが、2008年は平均8,788ドルに上昇している。

＊3）オーバーライド：マサチューセッツ州では、町が独自に固定資産税率を決めることができるのだが、その自由をなかば奪う「条例2.5」がある。これは、税金の値上がりを抑える目的で作られ州の住民投票で可決された条例で、税収入を前年度の2.5％以上増加させてはならないと定めている。しかし、公共施設の新築や改築などで特別な収入が必要になったときには、「オーバーライド」と呼ばれる住民投票で可決されば一時的措置として覆すことができる。近年は、公立学校の授業や課外授業を維持するためにどの町でも毎年のようにオーバーライドが必要になっている。

＊4）マサチューセッツ州 Massachusetts Department of Elementary and Secondary Education の公式資料による。

★プロフィール★
わたなべ　ゆかり・1960年兵庫県生まれ。京都大学医療技術短期大学部卒、同大学部専攻科修了。京都大学医学部付属病院に三年間勤務。その後ロンドン留学、日本語学校のコーディネーター、医療製品製造会社勤務などを経験。2001年『ノーティアーズ』で第七回小説新潮長篇新人賞を受賞。2003年二作目『神たちの誤算』を発表。現在はボストン郊外レキシントン市で夫と娘の三人暮らし。翻訳やエッセイ執筆の日々を送る。
＜著者のブログ＞ http://watanabeyukari.weblogs.jp/

お詫びと訂正　先月号掲載の「バトルグリーン／連載エッセイ16」の本文中で数字が三カ所抜けていました。不手際をお詫びするとともに以下のように訂正いたします。二段目左から九行目「高校生の**100**％が」／四段目左から五行目「一時間に**11**ドルもらえる」／五段目右から四行目「地域銀行を設立し、**28**人の個人に」。

Inside Oct　Page 10　10/30/10, 8:31 PM　Adobe PageMaker 6.5J/PPC

バトルグリーン／連載エッセイ18

生徒の視点

渡辺 由佳里

先月号で、「よい教育」についての親や教育関係者、そしてマスメディアのとらえかたについて語ったが、当の生徒たちはどう感じているのだろう?

＊＊＊

子供たちは学校という場で種々のストレスを覚える。

たとえば、レキシントン町の教育関係者たちは、選択基準そのものが疑問視される高校や大学のランキングに親が踊らされ、わが子を「よい大学」に入れるために学校や子供にプレッシャーを与える風潮を懸念している。

私が会ったレキシントン高校（以降LHSと省略）の生徒たちも、「そういう親はたくさんいる」と苦笑混じりに認めた。「わが子がGifted（＊註1）かSped（＊註2）のどっちかだと信じて、学校を説得しようとするのが典型的なレキシントンの親」と冗談まじりに批判した生徒もいた。実力が及ばないのに最も難しいクラス（APあるいはオナーズ）にわが子を入れようとして学校に抗議する親や、数学の飛び級をするために夏休みに私立高校の特別クラスに通わせる親は少なくない。いっぽうで、学校がわが子をSpedだと認めないので学校を訴訟する親もいる。

だが、生徒に「あなた自身はプレッシャーを感じている?」とたずねると、ほぼ全員が「私は特に感じていない。それほどがんばっていないから」と答えるのである。「親はうるさく言うけれど、聞き流している」と答えた子もいた。一生懸命やっていることを認めると格好悪いと思っているからかもしれない。けれども、A平均の学生も、CやDがある学生も、学業以外に情熱を覚える芸術やスポーツがあり、学校生活を楽しむゆとりがあるという印象は同様で、日本の高校生のように勉強だけをしている、という生徒には一人も会わなかった。

＊＊＊

学校でのもうひとつの大きなストレスは、「属するプレッシャー」だ。映画『Mean Girls』などで描かれているように、高校ではファッションに気を配り、男子生徒に人気がある「ポピュラーガールズ」と呼ばれる女子生徒のグループが存在し、自分たちの気に入らない子にいやがらせをしたり、無視したりする。頻繁にパーティなどを催し、その招待を武器にすることもある。男子の場合はスポーツができて人気がある生徒が暴力で弱いものいじめをする。日本で問題になっている「いじめ」と類似した問題がここアメリカにも存在する。

ただし、レキシントン公立学校の「いじめ」の現実は少々異なる。

まず、小学生から高校卒業生まで幅広い年齢の生徒を取材したが、人種差別を感じた者は皆無で、男子生徒三人をのぞき、全員が「いじめを目撃したことも、体験したこともない」と答えたことである。数少ない被害者の証言からは、いじめっ子のタイプも異なる。腕力があるスポーツ選手というよりも、「金銭的に恵まれ、親から甘やかされ、口達者」な男子生徒がドラッグやアルコールでグループを操り、そこから逃れようとする者には自分の人間関係ネットワークを使って嫌がらせをするのだという。だがもっとも興味深いのは、いじめが起こるのは中学校であり、他の地域や日本でいじめの多い小学校や高校でのいじめを訴えた者がいなかったという事実である。

＊＊＊

なぜこのような違いがあるのだろう?

まず小学校でのいじめがないことについては、学校の努力を評価するべきだろう。

レキシントン公立学校では、教師にトレーニングを与え、いじめの芽を最初から摘み取る対策を徹底している。小学校のPTA会長を経て小学校の教師になったシルバーマンは、子供の年齢に応じたいじめやからかいの特性を挙げ、教師がそれを早期に発見し、即座に対応する重要性を語ってくれた。それを聞いて私は娘の小学校の担任教師が、「このグループに入ることができるのは、ブロンドの子だけ」といった「排他的グループ」を作るのを禁じていたことを思い出した。たぶん何よりも効果的なのは、教師が「私はいじめを見逃さない」、「いじめっ子の味方はしない」というきっぱりとした態度を生徒に示すことなのだろう。

中学校でいじめが増えるのは、教師の影響力が弱まると同時に人気者集団に属する欲求が強くなるからなのかもしれない。また、中学校は社会が狭いために、前述の典型的な「人気者」が支配者階級になることができ、支配者のいじめや無視のターゲットになると逃げ場がほとんどない。だが、LHSの在校生と卒業生によると、中学校での「人気者」たちは高校に入学すると「ただのひと」になってしまい、影響力を失う。LHSには、中学とは異なり、ブランド品にこだわる女子や自分の意見を持たない女子が馬鹿にされ、フットボールなどのスポーツ選手よりも演劇や音楽の才能がある男子が人気者になる校風があるということだ。

＊＊＊

このLHSの校風はどこから生まれるのだろう?

まずLHSでは、フットボールといったスポーツよりも吹奏楽、オーケストラ、ジャズ、演劇、数学チーム、ディベートチームなどのほうが有名である。ここが周辺の町の高校とは大きく異なる。LHSでもスポーツ好きの生徒にとってはスポーツ選手は魅力的な存在だが、数学チーム、ディベートチーム、ジャズグループ、アカペラグループ、演劇・ミュージカルといった小社会にはそれぞれのスターが存在し、そこではフットボールのスター選手には「それ、誰?」といった反応しかもどってこない。次に、LHSには圧倒的な人種のマジョリティがなく、学校、保護者、生徒の協働により、生徒のディバーシティを尊重し、ゲイの生徒がおおっぴらに自分の性的オリエンテーションを公表できる雰囲気が確立している。

＊＊＊

LHSはSATスコアの平均点が高いことで知られており、昨年度は（入試などの選考過程がある高校を除いて）州で最高位（＊註3）だったが、SATで満点を取った生徒でさえテストの点数の高さをLHSの誇りだとは考えていない。生徒たちは、「（点数を気にする）アジア系の生徒が多いからあたりまえ」、「もともと勉強好きの生徒が集まっているだけのこと。特に教師やプログラムが良いからではない」、と世間のランキング熱を冷めた目で見ている。

＊＊＊

生徒たちにとってのLHSの誇りは、点数ではない。それよりも、「政治や社会的正義について他校よりも敏感である」ことであり、「豊富なプログラムやクラブ、社会活動に応じて多くの小社会が存在する」ことであり、「自分のアイデンティティを隠したり、否定したりしなくてもよい」ことなのである。ある学生が私に言ったように、「そのつもりがあれば、必ず自分を受け入れてくれる場がみつけられる」学校こそが「良い学校」といえるかもしれない。

註釈＊1）Gifted Childen:天賦の才がある子供。ただし、日本語の「天才」とは異なる。種々の定義があるが一般的にはその年齢のトップ2～5%に属する優れた才能がある子供。才能の分野も多様だが、レキシントン公立学校で対応しているのは数学のみ。学校により対応は異なるが、高校では飛び級や大学の延長クラスの受講を認めるシステムがある。

＊2）Sped：特別教育 Special Educationの略称。

＊3）SATスコア：Scholastic Assessment Test、大学進学適性試験。Critical Reading、Mathematics、Writingの三科目があり、それぞれで最高800点、最低200点。レキシントン高校の昨年度の平均点は614/631/618で（マグネットスクールを除く）マサチューセッツの公立高校では最高点。

★プロフィール★

わたなべ　ゆかり）・1960年兵庫県生まれ。京都大学医療技術短期大学部卒、同大学部専攻科修了。京都大学医学部付属病院に三年間勤務。その後ロンドン留学、日本語学校のコーディネーター、医療製品製造会社勤務などを経験。2001年『ノーティアーズ』で第七回小説新潮長篇新人賞を受賞。2003年二作目『神たちの誤算』を発表。現在はボストン郊外レキシントン市で夫と娘の三人暮らし。翻訳やエッセイ執筆の日々を送る。

＜著者のブログ＞

http://watanabeyukari.weblogs.jp/

Inside Nov. Page 12 10/30/10, 8:34 PM Adobe PageMaker 6.5J/PPC

バトルグリーン／連載エッセイ19

新しい世代
― アメリカの民主主義の底力

渡辺 由佳里

二〇〇八年十一月四日の夜、バラック・オバマの大統領当選を祝うために十二万五千人もの人々がシカゴ市のGrant Parkに集まった。史上初の黒人（＊註1）大統領誕生に、黒人だけでなく、あらゆる人種、異なる宗教・文化背景の人々が肩を並べ、涙を流しながら抱き合い、喜びを分かちあった。

＊＊＊

それから二日後、予備選のときからオバマ支持の演奏をしてきたThe Decemberistのコンサートに行く機会に恵まれた。このバンドのファン層は圧倒的に三十歳以下で、レキシントン高校（LHS）に通う娘と友人たちの引率という言い訳がなければ、四十代後半の私には足を踏み入れにくい場所である。

その夜私が音楽以上に楽しんだのは、オバマの当選を祝う新しい世代のエネルギーだった。バンドのフロントマン、コリン・メロイがオバマを「われわれの大統領」と呼ぶと若い観衆は総立ちの大歓声で応えた。メロイがキャンペーンの合い言葉だった「Yes, we can!」と呼びかけると、観衆は「Yes, we did!」と応える。そして、コンサートの終盤で等身大のオバマの切り抜きが紹介され、ロックコンサートでおなじみのクラウド・サーフィンをしたのは、いかにも若者らしい一体感の表明だった。

＊＊＊

日本に住む私の父は、電話をするたびに「日本の政治家は腐っている」と怒り、「今の若者は無気力、無関心で日本の将来は闇だ」と嘆く。けれども、三十年前に私が大学で哲学を学ぶことに興味を示すと「きっと学生運動をする」と反対したのも彼である。私も理想主義の若者だったが、盲目的に体制を破壊することにエネルギーを注いでいるような学生運動には反感しか覚えなかった。その私を同級生たちは「無関心」だと非難した。日本の若者には「破壊」と「無関心」のふたつの選択しかないのだろうか？

＊＊＊

アメリカでもベトナム戦争に反対した左翼学生団体の「ウェザーアンダーグラウンド」に代表されるように若者たちが暴力による改革を試みた時代があった。

体制への不満は当時のように高まっている。ブッシュ大統領のもとで環境破壊が進み、対話を中心とした外交が消えて戦争という名で他国に侵略をするアメリカになった。だが彼らは、憤りのエネルギーを「破壊」ではなく「改善」に向けた。「よい大統領を選出することで国や世界を変えよう」、「そのためにボランティアで選挙運動をしよう」、それがオバマ支持者にとっての「愛国心」の表現だった。たぶんそこが日本の若者との大きな差だろう。

＊＊＊

コンサートに連れて行った娘と友人の会話を盗み聞きすると、大統領候補の政策のみならず主席補佐官（Chief of Staff）にまで話題が及ぶ。日本の高校生とはすでにそこが異なる。特にLHSの生徒は「他校よりも政治や社会正義の実現に関心がある」母校を誇りにしているようだ。リベラルな親の影響とばかりはいえないだろう。なぜなら、政治に無関心で教育熱心なアジア系移民の親を持つ生徒でさえ、「世界を変えたい」という意欲を口にするのだから。

ジュニアの夏にMITの権威あるリサーチプログラムに受け入れられ、MITとハーバード大学の両方に合格した中国系二世のアルバートは、数学と科学の優れた才能を持ちながらも、大学では政治を学びたいという意欲を語った。同じく親が中国大陸出身で数学と科学が得意なステファニーは、将来医学を学ぶ可能性を残しながらも、大学でジャーナリズムを学んでいる。彼らは、移民の親とは異なり、アメリカ合衆国を「私の国」と実感している。

＊＊＊

四年前LHSのジュニアだったエリックは、公立学校での民主主義教育が生徒に与える影響を教えてくれた生徒のひとりである。

彼は学生評議会員、学生新聞の記者、同性愛・性同一性障害の生徒が差別をされないように活動する「ゲイ・ストレート連合」のメンバー、生徒間の争いを調停する「学生調停者」などを兼任し、キリスト教保守派の攻撃からレキシントン公立学校を守る組織「レキシントン・ケアーズ」では大人からも重視されるリーダーのひとりだった。私が会ったときには、ロムニー州知事が拒否権を行使した「安全な学校と自殺防止プログラムのための資金」を州議員に覆してもらうために奔走しており、法案の内容と現状を町民に理解してもらう記事を地元の新聞に書く目的で州の代議士ジェイ・カウフマンを取材していた。

エリックが小学校三年生のときにクラス全員を州議会に招いてくれたのが、このカウフマンだった。その次には中学で別の代議士から歴史の授業で州議会の仕組みを学び、小学校五年生では担任から「自分の考えていることを他人に伝え、相手を説得するためにはどう訴えればよいのか」というスピーチの基本を徹底的に教わり、「子どもも、もっと政治に関わるべきである」という初めての演説を行った。

民主主義がただの理念ではなく生活に密着したものだとエリックが学んだのは中学生のときの体験だった。不動産税の値上げ率限度を無効にして赤字を一時的に解消するオーバーライドが住民投票で否決され、「レクスプレス」というレキシントン町の公共バスが運行中止になった。運転できない子供や老人は身動きが取れなくなる。そこで交通機関部と行政委員を訪ね、住民公開の行政委員会でスピーチを行い、住民五百八十人の署名を集めた。エリックのたゆまぬ努力に動かされた行政委員会は「交通機関諮問委員会」を設けて彼を学生代表に起用し、住民に働きかけることでバスを町に呼びもどした。体制を敵にしなくても望む結果を得られることをエリックは体験から学んだのだ。

＊＊＊

エリックの逸話は、「諸君が国のために何をなしうるのかを問うて欲しい」というジョン・F・ケネディの就任演説の一節（＊註2）を思い出させる。

アメリカでも若者は肝心の投票日になるとすっぽかす「当てにならない世代」とみなされてきたが、今回の選挙では、四十八年前のケネディ大統領誕生のときのように、新しい世代が国と世界のために情熱をこめて働いた。オバマの選挙運動でボランティアをし、彼を当選に導いたアメリカの「新しい世代」に、私はおおいに期待している。

大統領史研究家のドリス・カーンズグッドウィンがオバマの勝利演説の後こう言ったのが印象に残った。

「（オバマ当選へのプロセスは）政治をふたたび尊敬に値する職業にすることでしょう（＊註3）」

註釈＊1）：オバマの父はケニヤ人で母はカンザス州生まれの白人
＊2）：ジョン・F・ケネディの就任演説の一部。
「my fellow Americans: ask not what your country can do for you? ask what you can do for your country.」
『我が同胞であるアメリカ国民諸君。国が諸君のために何をしてくれるかを問うな。諸君が国のために、何をなしうるのかを問うて欲しい』
＊3）：「…make politics honorable vocation again」

★プロフィール★
わたなべ　ゆかり・1960年兵庫県生まれ。京都大学医療技術短期大学部卒、同大学部専攻科修了。京都大学医学部付属病院に三年間勤務。その後ロンドン留学、日本語学校のコーディネーター、医療製品製造会社勤務などを経験。2001年『ノーティアーズ』で第七回小説新潮長篇新人賞を受賞。2003年二作目『神たちの誤算』を発表。現在はボストン郊外レキシントン市で夫と娘の三人暮らし。翻訳やエッセイ執筆の日々を送る。
＜著者のブログ＞
http://watanabeyukari.weblogs.jp/

Inside Dec　Page 13　バトルグリーン　10/31/10, 8:43 PM　Adobe PageMaker 6.5J/PPC　21

バトルグリーン／連載エッセイ20

黒人大統領誕生の意味

渡辺 由佳里

今年もMartin Luther King, Jr. Day（以降MLK Jr. Dayと省略）が近づいてきた。これは非暴力的な黒人公民権運動の指導者で一九六八年に暗殺されたマーティン・ルーサー・キング・ジュニア牧師の功績をたたえる祝日で、毎年彼の誕生日（一月十五日）に近い一月の第三月曜日には全米各地でキング牧師の活動や公民権運動を記念するイベントが行われる。

レキシントン町でも、Lexington Coalition for Racial Equality (Lexington CORE) の主導で毎年MLK Jr. Dayのイベントが開催されてきたのだが、数年前からリーダーたちの高齢化と後継者不足で運営が困難になり、相談を持ちかけられたLexington No Place For Hate（以降LNPFHと省略）がこれを引き継ぐことになった。すでに町の恒例行事として定着していたMLK Jr. Dayイベントでは、町と警察の協力で当時の公民権運動を再現する行進を行い、その後町のホールで講演会や演奏をするというものである。LNPFHは伝統をそのまま受け継いだので、町の運営陣は主催者の変化を特に重要なものだとは感じていなかったふしがある。

ところが一昨年、LNPFHが一部のエスニックグループの全国的な政治的戦略の犠牲になり、MLK Jr. Dayを二ヵ月後に控えて突如解散の運命をたどることになった。このいきさつについては別の機会に語ることにするが、簡単に説明するとLNPFHはあるエスニックグループの利己的な政治戦略のターゲットになり、その圧力に負けた町の指導者たちによって切捨てられたのである。

差別や偏見というきわめて難しい課題に取り組む私たち運営委員は、公的な場では政治的に中立であろうと努めてきた。ことに黒人のCさんは、「私は政治に関することは語らない主義。だから誰も私の政治的立場を知らない」と公言してきたほど発言には非常に注意を払ってきた。そんなLNPFHが、政治戦略の犠牲にされた不条理に私たちは深い失望と憤りを覚えていた。しかし、とりあえず目前に迫ったMLK Jr. Dayイベントを見捨てるわけにはゆかない。LNPFH運営委員は、「MLK Jr. Day運営委員会」を急設して無事に町の伝統を守ったのである。

＊＊＊

MLK Jr. Day運営委員会のメンバーが企画会議で再会したのは、まだバラック・オバマの大統領当選の興奮がさめない翌週だった。

最初に目に入ったのはCさんの姿だった。私は、一瞬喜びを彼と分かち合うべきかどうか迷った。

ハーバード大学を卒業し、エンジニアとしてNASAに就職したCさんは、ハーバード大学の大学院を卒業した私の舅と同年代である。舅は、私と夫が共和党員ではないことを知りながらも、私たちの前でおおっぴらにリベラルの理念や公民権運動家、環境保護論者を揶揄し、オバマに対する差別的なEメールを送りつけてくる。逆にCさんはジョークでも政治に関する話題は無視する。黒人が大学入学選考や職場で優遇されるaffirmative actionを苦々しく批判する舅とは対照的に、Cさんは一度として差別された愚痴を語ったことがない。同時代に同じ大学で教育を受けた二人だが、差別の犠牲になったことがないWASP（白人、アングローサクソン、プロテスタント）の舅と、祖父が奴隷だった黒人のCさんでは体験に基づいた人生観が根本的に異なるのだ。Cさんの態度は、肌の色で差別されることも特別扱いされることもなく、実力だけで正当に評価されたいという強い願望の現われだと私は理解してきた。

しかし、この日のCさんは満面の笑顔で抱き合って再会を祝っただけでなく、オバマ当選の興奮をまったく包み隠そうとしなかった。Cさんだけではなく、会議に集まった者は誰一人として「ところで誰に投票した？」と尋ねることなく、待ちきれないようにオバマ当選の「個人的体験」を語り始めた。

ことにCさんの言葉は、他の誰よりも胸に響いた。

＊＊＊

Cさんにはレキシントン町で育った私と同年代の息子がいる。オバマの当選が決まった夜、その息子がシカゴからCさんに電話をかけてきてこう尋ねた。

「お父さん、あなたが生きているうちに（黒人の大統領が）実現すると想像したことがありましたか？」

Cさんは即座に「ノー」と答えたという。「私の生涯だけではなく、おまえの生涯でも実現するとは思わなかった」

Cさんと同年代の黒人たちは、すべてのニュース番組と新聞の世論調査がオバマ当選を予測しても、最後の最後まで白人が黒人を大統領に選ぶとは信じられなかったのである。彼らにとってのオバマの当選は、多くの意味を持ちすぎてひとことでは説明することができないようである。Cさんの知人で若い黒人歴史教師は、あまりにも多くの複雑な感情に圧倒されて「明日学校で生徒に何を語るべきなのかわからない」と打ち明けたという。

＊＊＊

マイノリティへの非営利教育プログラムを企画するCさんは、別の視点からもオバマ大統領が与える社会的影響に期待をかけている。それは黒人の子供たちの学業と社会での達成である。彼は、黒人の子供たちが学業で遅れを取る主要な原因が「自分に対する期待の低さ」だと信じている。子供は、良かれ悪しかれ無意識のうちに親や教師など周囲の大人の期待に沿おうとする。たとえば、教師が「アジア人は数学ができる」というポジティブなステレオタイプを言動で示すと、その教師に教わった多くのアジア人の子供たちは数学ができるようになる。同様に「黒人は勉強ができない。成功しない」といった周囲のネガティブな期待も子供を簡単に洗脳することができる。自己評価が低い親から低い期待をかけられた子供たちが成功することも難しい。この悪循環をオバマという非常に優れた頭脳を持つ黒人大統領が劇的に変えることができるのではないか、とCさんは期待するのである。

黒人がアメリカでもっともパワフルな地位に就くことで、社会全体が黒人に対してこれまでよりも高い期待をかける。成功してあたりまえの環境で育つ黒人の子供たちは、自分に対する期待を高め、成功を信じることができるのではないだろうか。

私たちはCさんの見解にうなずき、それぞれにとっての「オバマ大統領誕生の意味」を打ち明けあった。

今年のレキシントン町でのMLK Jr. Dayは、これまでよりも熱い会話が交わされることになりそうだ。

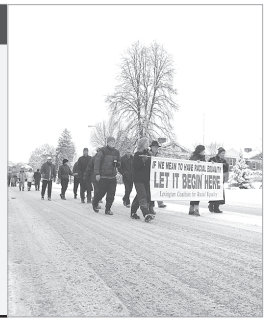
★わたなべ　ゆかり★
1960年兵庫県生まれ
京都大学医療技術短期大学部卒、同大学部専攻科修了
京都大学医学部付属病院に三年間勤務
その後ロンドン留学、日本語学校のコーディネーター、
医療製品製造会社勤務などを経験
2001年『ノーティアーズ』で第七回小説新潮長篇新人賞を受賞
2003年二作目『神たちの誤算』を発表
現在はボストン郊外レキシントン市で夫と娘の三人暮らし
翻訳やエッセイ執筆の日々を送る
●著者のブログ●
http://watanabeyukari.weblogs.jp/

Inside Jan.　Page 12　10/31/10, 8:53 AM　Adobe PageMaker 6.5J/PPC

バトルグリーン／連載エッセイ21

それでも信じるほうを選ぶ

渡辺 由佳里



一月十八日午前四時、吹雪の悪夢がまだ瞼に残っていた私は窓から外を見て同じ風景なのに驚いた。今日は、MLK Jr 記念行事が行われる大切な日である。

銃弾に倒れたキング牧師が達成した人権運動をたたえるこの記念行事は、もともとLexington Coalition for Racial Equalityというグループが十六年前に始めたものである。だが創始メンバーの高齢化と後継者不足で企画が困難になり、二年前からLexington No Place For Hate（以降LNPFHと省略）が実際の運営を引き継いだといういきさつがある。

ネットの天気予報では積雪は六〜九インチに達するという。

この天気では誰も来ないのではないか。ポリスカーの先導で行うユニティ行進はできるのか……。

午後二時。すでに積雪は九インチ近いように思えたが、雪を頭に載せたミニットマンの銅像脇に集まったのはいつもとほとんど変わらぬ顔ぶれだった。私たちが行進を始めるやいなや、町の角で戦争反対のデモンストレーションをしていたグループが小走りに行進の後尾に加わったのも愉快なオマケだ。ゆっくり歩く私たちの後ろを、運悪く行進の時間に出くわしてしまった車の行列が続く。行政委員のマンツが「ほら後ろを見てごらん。車が並んですごい行進に見えるから」と言うので行事専任カメラマンとしてなるべく立派に見える写真を撮った。溶けた雪で膝まで濡れてもちっとも寒いとは感じなかったのは、子供のころ雪の中で遊んだ感覚だったからだ。

＊＊＊

人数もいつもの半分くらいだから上出来だ。今年はオバマ大統領就任を祝うために講演ではなく参加者同士のディスカッションなので、人数が少ないのは障害にはならない。話しやすいように八人前後の小グループに分けて円陣を作り、「オバマの大統領就任がそれぞれにとって意味すること」、「キング牧師が夢見た将来とオバマの当選との関係」、「この国の将来」といったテーマで話し合うと、時間はいくらあっても足らない。多くの出席者はキング牧師とケネディ兄弟の暗殺があった暗い時代を覚えている高齢者たちだ。アフリカ系アメリカ人はさほど多くないが、人権運動にかかわってきた人々の「つい涙が出た」というオバマ当選の体験談には親密感を覚え、知識人たちによる歴史の解説や未来展望は外国人として歴史や政治の勉強になった。

だが、出席者のうちひとりだけが私を複雑な気分にさせた。

ペニー（仮名）が訴えかけるような目で見ているので笑顔で応じたが、彼女が何を求めているのかわからない。一年半前の出来事を思い出すと、それを探し出すのも気がひける。

＊＊＊

「No Place For Hate」の名を連想させる「No Place For Denial」というグループが登場したのは二〇〇七年の夏である。背後にあるのは、全国的なアルメニア系アメリカ人（以降米アルメニア人と省略）組織ということだった。

なぜ米アルメニア人がこんなものを作ったのか語る前にまずNPFHのプログラムについて説明しよう。

NPFHは、ユダヤ人の人権を守るために生まれ広範囲の人権擁護組織として発展したADL（Anti-Defamation League）のニューイングランド支部が、マサチューセッツ地方自治体協会と共同で開発した人権擁護とディバーシティ教育のプログラムである。レキシントン町は早い時期から参加を決め、町、警察、公立学校など公的機関の代表者と町民の代表者が同等の立場で協働してきた。同性愛の両親を持つ子供が安心して通える公立学校にするための教育に反対して小学校と公立学校を二組の親が訴訟したときに闘ったのはLNPFHである。そのドミノ効果で町が白人優先主義のヘイトグループのターゲットになったとき、町、警察、学校、住民をまとめて対応したのもLNPFHである。そのとき私たちが守った同性愛の親のひとりで、グリーンでの集会で涙を流して「この町に住んでよかった」と演説したのがペニーだった。

さて次はADLと米アルメニア人団体の関係である。これには非常に複雑な歴史と国際政治が絡んでいる。一九一五年〜一七年のオットマン帝国（現在のトルコ）によるアルメニア人虐殺は、正式には「genocide」とは呼ばれておらず、米国下院にトルコ政府に「genocide」と呼ぶことを要求する採決を下させることが米アルメニア人の間での第一目標になっている。一方で、イスラム教の国の中では最も親イスラエルのトルコ政府を刺激する行動を避けるADLに米アルメニア団体は痺れを切らせていた。そこで、ADL全国組織に政治的圧力を加えるために、地方自治体にNPFHプログラムを切り捨てるよう要請する戦略を決めたのである。

NPFHがADLに政治的プレッシャーを与える道具に決まった時点でNPFHは死刑宣告を受けたようなものだったのだが、私たちには知る由もなかった。

＊＊＊

NPFHプログラムを作ったニューイングランド支部のADLは最初から「genocide」と呼んでいたし、数々の成功を収めてきたLNPFHは町にとって有用なグループだった。私たちは町の米アルメニア人と話し合おうとしたが、戻ってきたのは敵意に満ちた攻撃のみだった。レキシントン町の行政委員たちも最初のうちはこのプログラムを手放すつもりはまったくなかった。しかし、会議のたびに近隣の町から押し寄せる米アルメニア人の数と、高齢者に虐殺のむごい歴史を語らせて感情的にADLとそれが運営するNPFHを攻撃する戦略、そして新聞を利用した住民感情のコントロールに疲弊を覚えたようだ。

存続を決めるために十一月に行われた行政委員会会議の席はあまりにも米アルメニア人の数が多くてキャリーホールを使うことになった。皮肉なことに、MLK Jr 記念行事と同じ会場である。その夜、まるでわれわれLNPFHが直接「genocide」を行ったかのような糾弾の嵐の後、マイクを持って立ち上がったのがペニーだった。

以前私たちに感謝をしたときのように涙を浮かべたペニーは、驚くことに「こんなに気の毒な人々の気持ちは無視できない。町はNPFHと手を切るべきだ」と言ったのである。

隣に立っていたLNPFH運営委員会のメンバーが「ペニー、彼らは将来あなたを守ってはくれないわよ」と独り言をつぶやいたのが今も耳に残る。

＊＊＊

LNPFHはこのようにして切捨てられ、それ以降町には同じようなグループは作られていない。そしてイラク戦争や選挙、不況、などの差し迫る問題のために現在「genocide」の本会議での採決に興味を持つ下院議員はほぼ皆無だ。何のためのキャンペーンだったのか？

目前に迫るMLK Jr. 記念行事のことを考えたらおちこんでいる暇はない。私たちはNPFHの名をプログラムから取り去り、MLK Jr 記念行事実行委員会として計画を続けた。

だから、今年も雪くらいで負けたりはしないのだ。

ペニーはどう思っているのか知らないが、私は彼女を憎んではいない。彼女を含め多くの人は理性ではなく感情でものを考えると知っているから。オバマ大統領の誕生は、米国民に理性でものを考えるきっかけを与えてくれるかもしれない。いや、そうあってほしい。

わたなべ　ゆかり・1960年兵庫県生まれ。京都大学医療技術短期大学部卒、同大学部専攻科修了。京都大学医学部付属病院に三年間勤務。その後ロンドン留学、日本語学校のコーディネーター、医療製品製造会社勤務などを経験。2001年『ノーティアーズ』で第七回小説新潮長篇新人賞を受賞。2003年二作目『神たちの誤算』を発表。現在はボストン郊外レキシントン市で夫と娘の三人暮らし。翻訳やエッセイ執筆の日々を送る。
＜著者のブログ＞
http://watanabeyukari.weblogs.jp/

Inside Feb　Page 7　10/31/10, 8:55 AM　Adobe PageMaker 6.5J/PPC

バトルグリーン／連載エッセイ最終回

渡辺 由佳里

Make a difference

人生の折り返し地点に差しかかり、自分よりもひと世代上の人々の生き方が気になるようになった。すばらしい学歴がありながらも、引退後は一日中テレビに釘付けで、たまに外出するときには昔からの仲間とゴルフやテニスをするだけ、という人がいる。冬になると暖かいフロリダやアリゾナで日光浴をしながら同じような境遇の仲間とおしゃべりやランチに時間を費やす人も多いようだ。何の苦労もないゆったりした生活を羨ましく思えないでもないが、過去の栄光にしがみつく人、ゴルフやテニスだけの生活、テレビや新聞相手の政治談議には魅力を感じない

その一方で寒いニューイングランドに残り、七十や八十歳の高齢で仕事やボランティアの現役を続けている人もいる。過去の経験を積み重ねているだけあって若い世代が学ぶことは多く、話が興味深く、人間としても魅力的である。

どちらのタイプの高齢者になりたいかと尋ねられたら、もちろん後者である。

どうすればそんな高齢者になれるのだろう？

私はむかし小説を出版したとき雑誌の取材で「あなたにとって何が幸福か」といった意味の質問をされ、「朝目が覚めるのが待ち遠しくてたまらない仕事があること」と答えたことがある。それと同じようなことを最近口にしたのが後者のタイプの引退者だった。

＊＊＊

Lexington No Place For Hate（以降LNPFHと省略）の活動で出会ったチャールズ・マーティンさんは（はっきり尋ねたことがないので定かではないが）たぶん私の父や舅と同年代（七十代後半）だと思う。すでに引退しているが、LNPFHやマーティンルーサーキング牧師の記念行事などのボランティア、趣味の系図学、そして非営利団体専門のビジネスコンサルタント業で多忙な生活を続けている。大雪が降ると自分の家のドライブウエイだけでなく公共の消火栓まわりの雪かきをする体力もある。

ハーバード大学で工学を学び、レイシオンやNASAにエンジニアとして勤めたマーティンさんは、特に最初のうち職場で唯一のアフリカ系アメリカ人であることが多かった。けれども、職場で差別を感じたこともないし、実力に応じた評価をされてきたと言う。すべてにおいて私に「こうありたい」と感じさせてくれるお手本なのである。

＊＊＊

収入のために仕事をしなくても良い状況になったいま、ボランティアにせよコンサルタントの仕事にせよマーティンさんの選択基準は、「Make a difference」なのだそうだ。

「Make a difference」とは簡単に説明すると社会や個人に何か良い影響を与えることである。自分を取り巻く環境や社会状況で何かが欠けている、何かがパーフェクトではない、と感じることは誰にでもあるだろう。それを変えようとする努力のことである。日本人にはちょっとわかりにくいコンセプトだろう。日本には、社会奉仕をする人に対して「宗教じみている」、「いい気持ちになりたいだけの自己満足」という皮肉な見方をする人が多いような気がする。良い気分にさせてくれることは事実だが、自己満足とも宗教的な奉仕の感覚とも微妙に異なるのが「Make a difference」である。

＊＊＊

たとえば、マーティンさんが引退後手がけている企画のひとつに、STEM(Science, Technology, Engineering and Mathematics) Academyがある。工学の分野では女性、アフリカ系アメリカ人、ラテン系アメリカ人の数は圧倒的に少ない。マーティンさんはここに注目し、これらのグループからのエンジニアが将来増えるように、中学や高校生のうちに工学とはどんなもので、いかに面白いものかを紹介するプログラムをとある工科大学との協力のもとに作り上げ、それを近郊の町の公立高校に取り上げてもらっている。

マーティンさんの企画のユニークさは、体験に基づいた体系的な協力関係づくりである。彼は、子供の成功には、高校や大学だけでなく、家庭や早期教育、企業、地域など総合的なアプローチが必要だと信じている。だから彼のプログラムには、親、中学校、高校、大学、企業、身近なお手本となるプロのエンジニア、とエンジニア誕生に導く要素がすべて含まれている。つまり、マーティンさんが「良い気分」になることでは終わらない、現実的な結果を狙ったものなのである。

＊＊＊

人間は一人では生きてゆけない。どこかで誰かに助けられている。

マーティンさんの場合それは大学教育を受け教育熱心だった母であり、「君はエンジニアになってはどうか？」と彼に助言した九年生（こちらの高校一年生）のときの数学の教師であった。この教師がエンジニアという言葉を口にするまで、マーティンさんはそんな職業があるということさえ知らなかった。そしてエンジニアになったマーティンさんが感じたのは、「これほど面白い仕事はない」という感覚だ。遊びのように面白いことを仕事にする、という喜びを体験したマーティンさんだからこそ、後輩たちに少なくとも「選ぶ機会」を与えたいのだ。

土曜日の課外授業を受けたからといってすべての子供がエンジニアになるとはマーティンさんも期待してはいないが、たとえひとりの子供の人生でも改善できればそれは「Make a difference」である。マーティンさんが言うように「自分が生まれてきたことの意味を感じさせてくれる」ことだから「Make a difference」は本人にとっても大切なことなのだ。

＊＊＊

「Make a difference」の有名な例はマイクロソフト社の創始者ビル・ゲイツだろう。彼は成功を活かしてビル&メリンダ・ゲイツ財団(Bill & Melinda Gates Foundation, B&MGF)という世界最大の慈善基金団体を作り、現在は全世界の貧困や疫病の撲滅に全力を注ぎ込んでいる。私の身近では、約二十年前に専門医師、看護師、病院、企業を巻き込み、日本に「失禁対策」を打ち立てる偉業を遂げた看護師がいる。

だが、マーティンさんが言うように「Make a difference」はそれぞれにとって異なる。

友人から仕事をやめて全力投入することを求められて断ったとき、私たちの友情にしばしひびが入った。そのときに友人にきちんと説明できなかったのは、彼女と私の「Make a difference」は違って当然なのだということだ。

何がそうなのかは実際にいろんなことを体験してみないとわからない。

最近、私には新しい「Make a difference」との出会いがあり、毎朝目覚めるのが待ち遠しくてならない。それについてはまたいつかお話ししたいと思う。

＊＊＊

これまで長年お付き合いいただき、ありがとうございました。

★プロフィール★

わたなべ　ゆかり）・1960年兵庫県生まれ。京都大学医療技術短期大学部卒、同大学部専攻科修了。京都大学医学部付属病院に三年間勤務。その後ロンドン留学、日本語学校のコーディネーター、医療製品製造会社勤務などを経験。2001年『ノーティアーズ』で第七回小説新潮長篇新人賞を受賞。2003年二作目『神たちの誤算』を発表。現在はボストン郊外レキシントン市で夫と娘の三人暮らし。翻訳やエッセイ執筆の日々を送る。

＜著者のブログ＞
http://watanabeyukari.weblogs.jp/

Inside Mar.　Page 13　10/31/10, 8:41 PM　Adobe PageMaker 6.5J/PPC

著者：渡辺由佳里

兵庫県生まれ。京都大学医療技術短期大学部卒、同大学部専攻科修了。卒業後は助産婦として京都大学医学部付属病院に就職する。その後、英国で英語教師養成学校のコースをトップで修了したものの英語教師の職が見つからないために日本語学校に勤務し、広告業、外資系医療製品製造会社勤務など、さまざまな職業を経験。
平成13年/2001年に「ノー　ティアーズ」で小説新潮長篇新人賞を受賞。翌年「神たちの誤算」を新潮社から出版。そのほか短編、現代詩、エッセイを複数の月刊誌・雑誌で発表、また翻訳作品に「妄想に取り憑かれる人々」（日経BP社）、「看護診断にもとづく在宅看護ケア」（医学書院）などがある。
英国、香港、スイスの滞在経験があり、1995年より米国移住。その他訪問した国（地域）は、数え切れない。

現在住んでいるマサチューセッツ州の町で公立学校でのボランティア、町の各種委員会の会員、人権に関する市民グループLexington CommUNITY の運営委員、ブログ管理人などを務める。

「洋書ファンクラブ」にて洋書を中心としたレビュー、「洋書ニュース」で業界、文芸賞、電子書籍リーダーなどの情報、「洋書ファンクラブ ジュニア」にて日本に住む子供向けの読書教育プログラム、マーケティングとPRの専門家David Meerman ScottのFreshspot Marketing, LLCにてコンサルティング、を行っている。最近の寄稿／執筆／連載に、「今日から英語でTwitter つぶやき英語表現ハンドブック（語研）」、「多聴多読マガジン（コスモピア）」、「月刊アルコムワールド（アルクネットワークス）」など。２０１０年１０月２２日**「ゆるく、自由に、そして有意義に―ストレスフリー・ツイッター術」**（朝日出版社）刊行
http://watanabeyukari.weblogs.jp/blog/2010/10/yurui-twitter.html

気軽にメールあるいはTwitterでお問い合わせください。
　Twitter : http://twitter.com/#!/YukariWatanabe
　メールはブログのプロファイルからどうぞ。
http://watanabeyukari.weblogs.jp/about.html